

2024 年度 静岡大学 地域創造学環
2024 Shizuoka University, School of Regional Development

フィールドワーク 報告書

Fieldwork Report



大学を飛び出し、
地域のみなさんと連携し学んできた成果を報告します。

地域創造学環フィールドワーク報告書(最終号)の発刊にあたって

本学は2023年度に地域創造学環を発展させるとともに他の6学部の教育成果を融合して新学部「グローバル共創科学部」を開設し、それにともない、2022年度を最後に地域創造学環の学生募集を停止いたしました。そのことにより、2022年度に入学した7期生が2024年度末にフィールドワークを終えるとともに、大部分のフィールドワークが終了することとなりました（グローバル共創科学部では、フィールドワークに類似したコラボラティブ・ワークスという授業を2023年度より実施しています）。本報告書は、その7期生が2024年度に取り組んだ活動を中心に、これまでのフィールドワークの成果をまとめたものです。

2016年度の地域創造学環の開設とともに始まったフィールドワークは、これまで県内各地の自治体、各種団体、専門家、市民のみなさまのご支援・ご協力により、地域創造学環生の多様な学びと成長の機会となってきました。2019年度から2021年度の3年度は、新型コロナウイルス感染症の流行により活動に様々な制約を受けましたが、7期生が参加した2022年度からは、地域創造学環のフィールドワーク本来の姿を徐々に取り戻すことができました。

フィールドワークは、地域創造学環の教育プログラムの文字通りの「看板」です。卒業生に「どの授業が一番印象に残っている？」と尋ねると、必ずといっていいほど、「フィールドワーク」か「ゼミ」だという答えが返ってきます。フィールドワーク先で様々な方々と出会い、話し、協働することで得た気付きと経験、そして仲間たちと一緒に学んだ様々な事柄は、卒業生たちのその後の人生の「糧」となっているのでしょうか。きっとこれからもそうだと思います。

本報告書の発刊にあたり、これまでご支援・ご協力いただいたみなさまに、あらためて心より御礼申し上げます。

2025年8月20日

国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
水谷 洋一

目 次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ	3
2024年度フィールドワーク報告 ※報告内、学生の学年及び教員の職位等は2024年度で表記	
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 おまち	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館	14
浜松市 佐久間町	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町 商店街	22
松崎町 観光と防災	24
東伊豆町	26
伊豆半島全域（ジオパーク）	28
多世代の居場所づくり	30
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声	32

静岡市 清水港周辺地域

清水港周辺地域が「つながる」「ひろがる」「にぎわう」活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(スポーツプロモーション) 3年 日下部友香、西海士和花、平井朋美
(アート&マネジメント) 3年 鈴木愛理

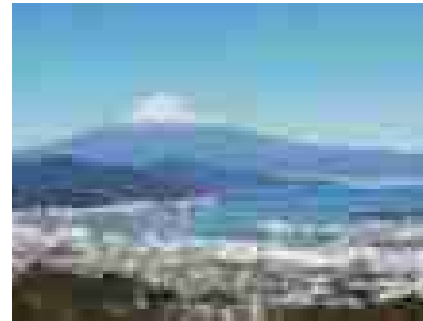
フィールドワーク実施協力者
有限会社都市環境デザイン研究所

指導教員：○准教授 石川宏之、教授 小田誠二、教授 杉山康司
※○は責任教員

地域概要

清水港周辺地域は、駿河湾で水揚げされた新鮮な海産物を味わえる「河岸の市」や、観覧車や遊園地、映画館等も有する大型複合施設「エスパルスドリームプラザ」、清水港の歴史や、貿易の象徴であった缶詰産業等について学べる「フェルケール博物館」、清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」など、魅力的な観光資源が多く存在する地域である。また、富士山が一望できる美しい景観、さくらももこさん原作の「ちびまる子ちゃん」の舞台、プロサッカーチーム「清水エスパルス」の本拠地など、多くの強みを持ち、大型外国客船の寄港による外国人観光客の存在など多彩な集客資源や多様な賑わいがある。

現在、当地域では人口減少や少子高齢化の地域課題と新型コロナウイルス収束による海外クルーズ船の再増加、集客施設整備により、地域と来訪者の交流や街なかへの人流対応が課題である。



清水港周辺地域



2023年度イベント
参加者・スタッフの集合写真

これまでの活動

2022年度以前

清水港の課題を整理した上で、メンバーにスポーツプロモーションコースの学生が多いという特徴から、スポーツを活かした地域活性化を目指す案として清水港を舞台としたロゲイニング企画「スマイルロゲイニング」を開催した。

2023年度

2022年度の反省を生かし、スマイルロゲイニング2開催に向け、準備を進めた。

1. イベントの企画・準備

最初に清水地区と浜田地区の連合自治会長さん、「清水おやこ劇場」さんとイベント内容についての意見交換会を行った。頂いた意見や2022年度イベントのアンケート結果を活かして企画を進めていき、次郎長通りを主とした周辺地域で「スマイルロゲイニング2」を開催することに決定した。

「CAFÉ OEC」の大石さんをはじめとした次郎長通り周辺に並ぶ店舗の方々のご協力のもとポイント地点の選定を行ったほか、清水地区連合自治会長の隅倉さんには移動するポイント地点としてご協力をいただいた。さらに、ニュースポーツのモルックを導入するなど工夫を施した。

2. 「スマイルロゲイニング2」の実施

12月10日(日)に「スマイルロゲイニング2」を開催した。「清水市民活動センター」をスタートとし、各地点を巡ってゴールである「美濃輪神社」を目指し、チームごとに作戦を立て、ポイントの合計を競うイベントである。反省点もあったが、参加者に満足してもらうことができた。

2024年度の活動について

1. マップ企画・準備

私たちの代でフィールドワークとしての活動は最後になるため、2024年度の活動は今までのフィールドワークの活動を形に残し、静岡市清水港周辺地域に間接的に関わり続けるという目的のもと、静岡市清水港周辺地域のマップを作成することにした。前期のフィールドワークの活動では、実際に地域を訪問し、魅力あるお店や歴史のあるスポットをリストアップしたり、今までのフィールドワーク活動でお世話になった地域の方を中心に聞き込み調査を行った。

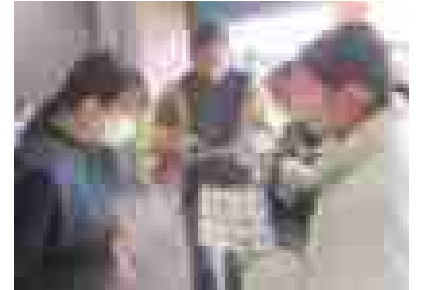
2. マップの作成

前期の活動で自分たちが発見したスポットを整理し、マップの作成を始めた。短い文章でお店の特徴が伝わるように文章を添削したり、魅力が伝わるような写真を撮影したりして、マップの内容を検討した。

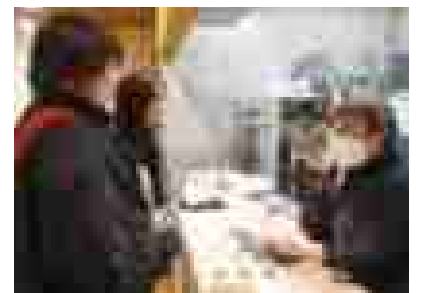
マップのデザインだけでなく、持ち歩きやすいサイズや、スマートフォンの地図アプリとの連携など、多くの人が手に取ることができる、どんな世代にも分かりやすいマップを心がけて作成した。

3. マップの完成・配布

完成した「清水おでかけMAP」は2000部印刷し、2025年2月12日に行われたフィールドワーク報告会にて配布した後、マップ作成に協力していただいたお店等に訪問し、チラシを置いていただく。



エスパルスドリームプラザでの調査



たかだアイスでの調査



作成した「清水おでかけMAP」 左：表紙 右：裏面

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って



日下部友香

地域の方々と交流を重ねることで清水港周辺地域の新たな魅力を発見し、活動に活かすことができました。フィールドワークを通して確実に成長できたと思います！



西海士和花

イベント運営や現地調査など、自分自身で実際に地域の方と交流することができて良い経験になりました！



鈴木愛理

現地調査を通して清水の街を身をもって知ることで、地域で求められている内容を見極める力と、それらを実際に形にする企画力が身につきました！



平井朋美

地域の方々の笑顔を見ることが私の楽しみであり、フィールドワークのやりがいでもありました。これまでの活動が少しでも地域の方々の記憶に残っていれば幸いです^^

静岡市 庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの

(スポーツプロモーション) 3年 利根川悠太、西山拓真、早乙女寛太、
上田涼斗、木元朝陽

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人静岡市まちづくり公社
(清水ナショナルトレーニングセンター、清水テルサ)
庵原地区連合自治会

指導教員：○准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、講師 平嶋裕輔

※○は責任教員

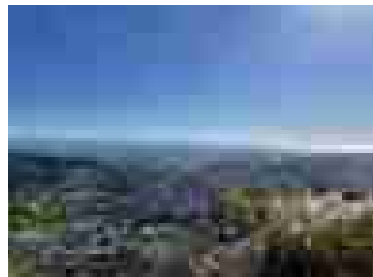
地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する町である。人口は約1万人で総世帯数は約3千世帯（連合自治会の数は19地区）である。庵原地区の特徴は、地区を囲う山々と、そこから眺望できる駿河湾の大海など素晴らしい自然にあふれていることである。また、傾斜があるため水捌けが非常に良く、特にみかんやお茶の生産が盛んである。さらに、庵原球場や清水ナショナルトレーニングセンターなどのスポーツ施設が充実しており、プロサッカーチームなどの合宿所となる。2023年には「くふうハヤテベンチャーズ静岡」という静岡県初のプロ野球チームが設立され、同チームは庵原球場（ちゅ〜るスタジアム清水）を本拠地として活動を行っており、今日、非常に注目を集めている。

このように庵原地区は、豊かな自然環境のもとで「食・スポーツ」が充実しており、貴重な資源のある地域といっていだろう。そして現在は、中部横断自動車道の開通に伴って、この地区に「道の駅」を開設しようという計画が立案されている。道の駅を作り、そこに多くの人が立ち寄り、庵原地区のことをさらに認知していただくことで、さらなる庵原地域の発展につながると考えられる。我々もこの計画に賛同し、「地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化」というテーマに基づいて活動を継続中である。



2024年 万灯祭の様子



庵原町の景色

これまでの活動

2023年までは連合自治会に加入している世帯へ、地域意識・行動とスポーツ活動との関連を問う大型アンケート調査を実施、また「清水いはら」のロゴマークを選定した。

2023年度は清水テルサにて行われた健康フェスタでのブース出店、ステージ発表や庵原フェスでスポーツイベントブースを出店。また、「くふうハヤテベンチャーズ静岡」に関する討論会も実施した。

2024年度の活動について

「だれでもスポーツday」イベントの参加

清水蛇塚スポーツグラウンドにて開催されたスポーツの日のイベントに運営補助として参加。ストラックアウトやキックターゲットなどのブースに分かれ運営補助を行った。

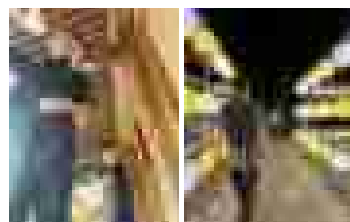
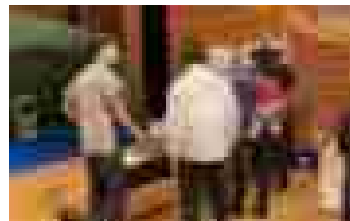
清水テルサにて開催された健康フェスタへのブース出店

昨年同様、清水テルサで開催された健康フェスタにてブローライフルのブースを出店。的に命中した数を点数化し、呼吸機能の健康度を確認してもらうとともに、ブローライフルという競技の周知にもつなげることができた。また、他ブースで行われていた、機械を用いた体力測定の補助にも参加させていただいた。前年よりも参加者が多く、大いに盛り上がった。

万灯祭への参加

この祭りは庵原地区の一乗寺で開催され、その住職である丹羽宗元氏を主催者として毎年行われる祭りである。その運営補助として参加した。

会場の事前準備、設営、撤去、駐車場整理、お化け屋敷の受付などを行った。参加者は子どもから高齢者まですべての年代の方と幅広く、庵原で一年に一度、地域住民が集まるイベントであるとの話を伺った。



庵原住民調査

先輩の実験の手伝いで庵原住民へ調査を行った。調査の目的は、くふうハヤテベンチャーズ静岡を事例として、本拠地球場直下の庵原地区住民が受けた社会効果について地域関与状況に着目しながら明らかにすることである。

我々は自治会にアンケート用紙を配布し、回収活動を行った。回収したデータは2596個で全員で打ち込みを行った。

結果として、くふうハヤテベンチャーズ静岡が庵原に来たことで庵原の認知度が上がったと感じている人が多いこと、子どもたちの学びの場が増えたと感じる人が多いことなど様々なことが分かった。

くふうハヤテベンチャーズ静岡観戦者調査

こちらも先輩の実験の手伝いとして調査を行った。今回は実際にくふうハヤテベンチャーズ静岡の本拠地である「ちゅ〜るスタジアム」でアンケートを配布し、調査を行った。調査の目的は新規参入球団の基礎実態を明らかにすることである。

結果として、観戦者の年齢の割合は、50代が最も多く全体の3割を占めていることが分かった。次に、40代、19歳〜29歳、30代の順番に観戦者の割合が大きいくことが分かった。また、ちゅ〜るスタジアムがある庵原地区の特徴として、高齢者が多いことから、中高生の観戦割合が著しく低く、若者世代に注目度が低いことが見受けられた。静岡県外の観戦者の詳細は愛知県が最も多く、トップリーグの本拠地がある首都圏から人が集まることが分かった。一方で球場の近くに中部横断自動車道が通っており、山梨県、長野県からの交通の便は良いにも関わらず、観戦者の割合が少ないことから、トップリーグの本拠地を構えない県の差がでたと考えられる。



これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

2年間のフィールドワークを通して、庵原地区の住民の温かさや優しさに触れることができ、住民の方々の協力もあって、庵原フェスや清水テルサなど様々なイベントにおけるブース出店などを成功させることが出来た。ここでフィールドワークとしての活動は終わるが、これまでのインタビューや会議などで得られた庵原ならではの高低差からなる需要に関する悩みの解決や地域活性化への道のりはまだまだ長いと思うのでこれから機会があれば積極的に関わることでこれまでの活動の感謝を庵原に伝えることが出来れば良いと思う。

早乙女寛太

庵原のフィールドワークを通して、イベントの経費や労働力などの困難、やりがいや達成感など多くのことを学ばせていただき、非常に充実した活動だった。活動の中で地域住民の方々と関わり、協働で作業をして繋がりを実感し、授業としてのフィールドワークが終了した後もまちづくりのお手伝いをしたい。くふうハヤテベンチャーズ静岡ができたことや、アンケートの結果から庵原という地域づくりに対してどのようなアプローチをしていけるかこれからも考えたい。

利根川悠太

スポーツと食が非常に密接に関係している庵原の地で活動することで、庵原の地の豊かさだけではなく人と人とのつながり、やさしさにも触れることができた。また、スポーツプロモーションコース所属として多くの人たちに健康づくりやスポーツをする喜びなどを伝えることができたと思う。フィールドワークは終了してしまいが、ここで得た経験を今後生かしていきたいと思う。

西山拓真

約2年半のフィールドワークでは様々な庵原町の活動に参加させて頂いた。活動の中で、地域の方々と交流するたびに、庵原町の魅力を感じると共に、多くの学びを得ることができた。

木元朝陽

私は庵原のいろいろな人々とかわることで庵原という町がスポーツであったり、祭りであったりいろんな分野でつながりがあることに感動を感じた。

上田涼斗

謝辞

清水ナショナルトレーニングセンター/J-STEPスタッフの方々

万灯祭関係者の方々、庵原フェス関係者の方々、清水テルサ並びに健康フェスタ関係者の方々

並びに庵原フィールドワーク活動にご協力いただいたすべての方々に、厚くお礼申し上げます。

静岡市 おまち

おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(地域経営) 3年 井上文誉、沖山寿幸
(アート&マネジメント) 3年 漆畑璃々花

フィールドワーク実施協力者
静岡おまちバル実行委員会
アップスカイ株式会社

指導教員：○准教授 原瑠璃彦、客員教授 平岡義和
※○は責任教員

地域概要

おまちバルとは、「おまち」と呼ばれる呉服町、両替町、七間町、常盤町、紺屋町を中心に開催されるイベントである。

静岡市に飲食店が多いことに注目し、格安に販売するチケットを利用して、参加している店舗をめぐってもらうことを通して、にぎわい創出を図っていこうという取り組みである。

その活動に協力する中で、2020年の秋からは、若い人の参加が少ないことに着目し、チラシの作成、Instagramの開設などの広報活動を中心に活動している。



静岡おまちバル【公式サイト】: omachibar.com

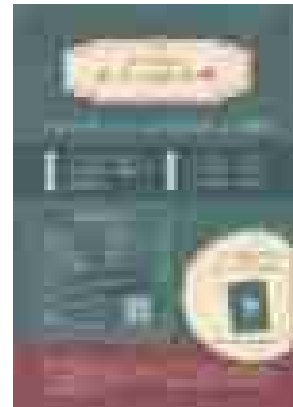
これまでの活動

【2021年度】

- ・オール静岡春バルWeek
学割キャンペーンのプロモーション
- ・静岡クラフトピアバル
市内のブルワリーのインタビュー記事作成



2021年度オール静岡春バルWeek



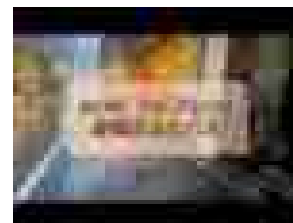
2022年度スイーツ小町

【2022年度】

- ・オール静岡春バルWeek
学割プロジェクトのプロモーション
- ・秋の甘味巡り スイーツ小町
学生主体イベントの企画運営
- ・オール静岡秋バルWeek2022
着物を着用しプロモーション



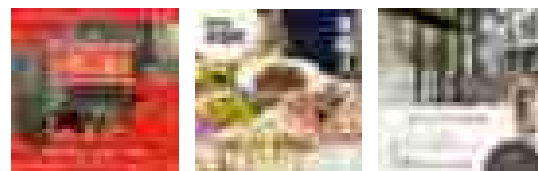
2022年度オール静岡秋バル
着物deバル



2023年度静岡秋バルめぐり
プロモーション動画

【2023年度】

- ・静岡秋バルめぐり2023
Instagramでの広報の開始
プロモーション動画の作成



2023年度静岡秋バルめぐり Instagram投稿画像

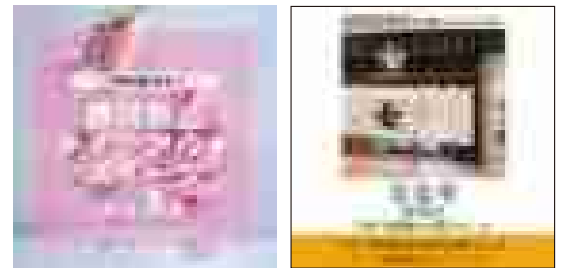
2024年度の活動について

【第25回静岡おまちバル】

今年度、新たに静岡のSNSマーケティング支援会社「アップスカイ株式会社」の協力のもと、学生向けのSNSプロモーションの一環としてInstagram投稿作成を実施した。

表紙の投稿に場所を大きく入れる、キャッチフレーズを親しみやすいものにするなど投稿内容にこだわった。

また、ストーリーズでの定期的な配信を行い、「アカウントを動かし続ける」ことを意識した。



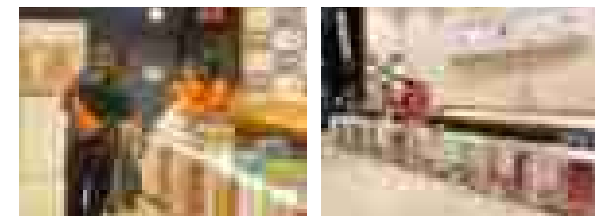
第25回でのInstagramの投稿画像

【第26回静岡おまちバル feat. French Bar】

前回のバルでの活動を踏まえて更に、アップスカイ社のInstagram運営における、バズを狙う手法やストーリーズ・いいね機能を活用したアプローチ方法など、個人SNSでは得られない公式SNS運用のノウハウを学んだ。

若者向けの投稿デザインを見直し、「静岡の学生が飲食店を紹介する」アカウント運営者のコンセプトを再設定した。

バル当日の抽選会では、アンケート回答と共にInstagramのフォローを促すことで、多くのフォロワーを獲得することができた。



第26回静岡おまちバルfeat.French Bar抽選会



第26回でのInstagramのアカウントと投稿画像

【今年度の活動を振り返って】

年度を重ねるごとに「若者から関心を集める方法」を見直し、昨年度から今年度にかけてはInstagramを活用したアプローチ方針を定め、SNSプロモーションの手法をアップスカイ社の協力のもと本格的に学ぶことができた。

その結果、約400人のフォロワーを獲得することができ、今後のおまちバルの活動につなげる重要な基盤を築くことができたと考えている。

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

【学生メンバーの反省・感想】

井上：おまちバルに関わり、地域の店舗や運営の方と連携して地域活性化に関わることができて良い経験になったと考える。また、Instagramでの発信を通してSNS発信の重要性などを学ぶことができ、デジタルの発展に伴う新しいコミュニティの形成に触れることができたと思う。

漆畑：公式SNSを運用する中で責任感を持って活動に取り組むことができ、個人のIllustrator編集技術を向上させることができた。また、フィールドワークを通じてイベント運営のノウハウを学び、大きく成長することができた。

沖山：おまちバル実行委員会の方々や先輩からフィールドワークについて学び、イベント運営やSNSプロモーションに協力でき、様々な方との協力関係を築くことの重要性や自分たちの役割を予定通りに完了することの難しさを実感できた。

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(地域経営) 3年 大森彩、鈴木琉斗
(地域環境・防災) 3年 藤井陽真利

フィールドワーク実施協力者
静岡浅間通り商店街振興組合

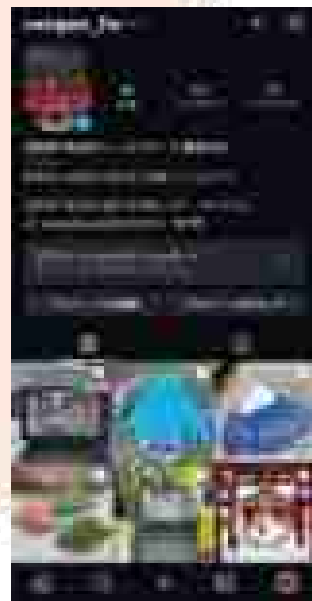
指導教員：○准教授 川原崎知洋、客員教授 平岡義和
※○は責任教員

地域概要

- 静岡市中心部に位置する静岡浅間神社の門前から直線600メートルほど伸びる「浅間通り」にある商店街。
- かつては静岡の産業や流通の中心地。
- 現在も歴史ある老舗店から新しいお店まで建ち並ぶ。
昨今若者をターゲットとした新規出店による利用者の増加。
- 2023年にはNHK大河ドラマ「どうする家康」が放送され話題に。
- 毎年6月には「わくぐりさん」、10月には「長政まつり」、
毎月1日に「安部の市」が開催される。

これまでの活動

- 輪くぐりさん
クイズラリー：浅間通り商店街について
詳しくなってもらえるような設問を作成
わくぐりんボー：イベントの名前とリンボーをかけた企画
フォトスポット：徳川家康のパネルを追加
- 長政まつり
カィエン・パラット：輪投げとけんけんぱを組み合わせたタイの遊び
地面にお絵かき：道路にチョークでお絵かきをしてもらう企画
- 足元灯：足元を照らすための照明で上部には展示台がある
富士山をテーマに、学生一人につき2作品展示
- その他
Instagram：商店街の魅力を発信
報告会：商店街の総会にて、今までの活用内容を商店街の方々へ報告



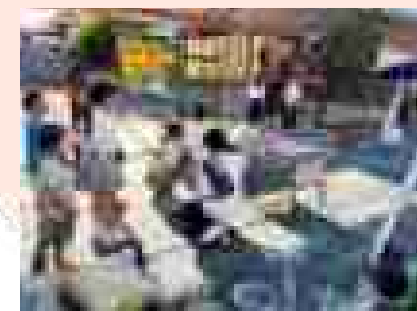
2024年度の活動について

- 輪くぐりさん
 - ・クイズラリー：足元灯に展示した作品についての設問を作成
 - ・わくぐりんボー：昨年の企画を引き継ぎ、参加賞も準備→クイズラリーへの参加人数は想定より少なかったものの、わくぐりんボーは人気企画となった。人手不足のなか可能な限りの運営ができた。
- 長政まつり
 - ・ソングラン：タイの遊びをもとに、水鉄砲でペットボトルの的を当ててもらう企画（参加人数47人）
 - ・地面にお絵かき：道路にチョークでお絵かきをしてもらう企画（参加人数約100人）→地面のチョークをソングランで使う水鉄砲で消すことで片付けの手間を削減、スムーズなイベントの進行ができた。
- 報告会へ参加
3年間お世話になった商店街の方々に、今までのフィールドワークで学んだことや感謝の気持ちを伝えた。



これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

- 輪くぐりさん
3年間参加して、来てくださる地域の方々は勿論、運営している商店街の方々も本当に楽しそうで、本当に浅間通り商店街が好きなのだと感じた。人数が限られている中、一人一人が役割を全うし、怪我もなく効率良く運営でき、臨機応変に対応する大切さも学べた。
- 長政まつり
商店街の方々がお祭りを盛り上げようとしている気持ちを強く感じ、人々を惹きつける商店街だと感じた。いかに工夫して子ども広場を成功させるかという観点のもと取り組み、商店街の方から多くの調整や助言をいただいた。事前に準備することや共有することの大切さを学んだ。
- 足元灯
足元灯を作成するうえでインターネットでは調べきれない静岡の歴史や情報を学ぶことができた。足元灯を、どうすれば多くの人に見てもらえるかと考えながら展示物を制作した。



焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(スポーツプロモーション) 3年 大石凜里花、大澤美潤
(アート&マネジメント) 3年 宮城羽那

指導教員：○教授 太田隆之、教授 国京則幸
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
焼津市行政経営部政策企画課
静岡市経済部商工観光課
NPO法人「浜の会」
焼津市観光協会
焼津水産高校
ゲストハウス「帆や」

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に1 kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。浜通りエリア内は、北浜通・城之腰・鯛ヶ島の3地区に分かれており、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的な家屋や、小路などの焼津市の歴史と文化が豊富にある地域である。

例として、明治時代に怪談小説で名の知れた小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資産だけでなく、地区ごとの夏祭りや、市民の皆さんが描いた行灯が夏の夜を照らす「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。

また、浜通りの町並みの保存や活性化を目指して、行政と住民が連携し浜通り活性化フォーラムなどの活動が行われている。

これまでの活動

①浜通りでの「あかり展」の準備・開催

準備期間では行燈を制作し、当日はその点検や同時開催されたイベントの呼びかけ・会場設営を行って回った。実際に長期間参加することによって、「あかり展」に臨む地域の皆さんの取り組む姿勢や、その思いを把握するとともに、当日の人出の多さや賑わいを体感した。

②焼津市内外の若者との交流と意見・情報交換

2023年9月に「わたしの商店街クエスト」の最終報告会と、11月に「わかものまちサミット 2023」に参加した。浜通り地区では市内他地域よりも早く少子高齢化が進んでいることを踏まえてこの企画に参加することで、各地の事例やそれらの意義や課題についてや、こうしたことを可能にするための団体や取組み・支援など、いくつかの条件がありうることを把握した。

③「海業振興モデル地区」である沼津市戸田漁港・地域の取り組みの調査

浜通りでの漁業やその関連産業をベースにした活性化の可能性を検討する上で、水産庁が取り組んでいる「海業」の振興を参考にするために、「海業」のモデル地域に指定された戸田漁港・地域でお話を伺った。

戸田地域では現在の浜通りと同じく、人口減少・若年層の流出問題に直面し、主要地場産業である漁業にも影響が出たという。そこで、そうした状況を打破するために取り組んだ具体的な内容や成果と課題についてご回答をいただいた。



2024年度の活動について

①浜通りフェスティバル」への参加・運営

今回、初の試みであった「浜通りフェスティバル」。浜通り地区において「あかり展・あんどんマルシェ」だけの集客とせず、継続的に人の集まる場所となる新たな昼間イベントを実施し、地域の魅力発信を行う目的で開催された。当日は、主に車の指示誘導を行いながら、自分たちも浜通りフェスに参加した。「浜通りフェスティバル」では、あかり展同様多くの人々が訪れており、売店や体験プログラムを楽しんでいる様子であった。体験プログラムは、食品サンプル作りや竹行灯作りなどバラエティーに富んでいる。大人も子どもも楽しめる内容が揃えられており、親子連れや友達同士で体験に参加する様子を多く見ることができた。「浜通りフェスティバル」を通し、イベントを行う際の集客率の高さを再認識した。浜通りに住む人達だけでなく、他の地区からも多くの方が訪れていたことを把握した。

②「海業振興モデル地区」である地頭方漁港の取り組みの調査

漁村では人口減少や高齢化の進行が深刻化していることがわかった。これにより活力の低下が著しく、国内外からの多様なニーズに応えることで地域の賑わいや所得と雇用を生み出すことを期待し計画が行われていることがわかった。マリンスポーツやマルシェなど、魅力的な取り組みが多くあること、魅力的な体験の場が多くあることに大きな価値を感じた。課題としては、販売するものの大部分が鮮魚であることが挙げられていた。加工する場が近くにない為捌いた状態など、そのまま食べられる状態での提供が難しい。また、市民の漁業・魚離れや漁業者の減少など浜通りと同様の問題点を抱えていることもわかった。今回の調査は、賑わいの拠点を作ることの重要性について再認識する機会となった。

③「あかり展」への参加

あかり展に参加し警備などを行う中で、様々な年代があかり展に参加していることが確認できた。浜通りを見回してみると、多くの人が、会場に設置された大きな行灯にイラストや文字を描いていた。飾られた行灯を眺めるだけでなく、当日に参加した人も楽しめるとても良いアイディアだと感じた。この行灯への書き込みは小さな子供が主ではあったが、幅広い年代の方が楽しんでいた。実際に書き込んでみたが、自分も一員になったように感じられる面から、参加者の浜通りへの愛着につながる良い案であると感じた。目当てとしては、焼津ならではの魚の加工品を買いに来る人や自分が描いた行灯を観に来る人が多かった。多くの行灯が並んでいる様子は非常に美しく、立ち止まって写真を撮る様子も多く伺えた。



これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

【宮城羽那】

このフィールドに所属している学環生は全員が焼津市出身ということもあり、地元の人間視点での意見を出すことが多くありました。焼津浜通りは現在の焼津市の漁業文化を形成した歴史的に重要な拠点です。

そのような場所でフィールドワークを行うことで大学までに学んできた地元のことを活かしながら活性化に繋げることができ、お世話になっている大切な場所に貢献することができたと思います。焼津浜通りフィールドは今後学環外で活動が続けていくことになっており、その内容は漁業以外にも広がっていくことになっています。これまでの私たちの活動に加え、より沢山の魅力が受け継がれていって欲しいと思います。

【大澤美潤】

地元である焼津市で行ったフィールドワークですが、新たな魅力を発見する良い機会となりました。馴染みのある土地でしたが実際に活動し地域の方と関わる中で、焼津の歴史や文化についても知る機会がありました。知識がついたことで、自分の地元をより大切に思うようになりました。

現在、人口減少や少子高齢化が問題になっているものの、浜通りで開催されたイベントでは驚くほどの盛況を誇っていました。水産業など他にはない焼津ならではの強みは素晴らしい財産であると思います。これからも魅力を発信し、より多くの方々に焼津の魅力を知っていただきたいと強く思っています。

【大石凜里花】

フィールドワークを始めた当初、私は歴史的な街並みや建造物、「波除けの堰」や「小路」といった有形の遺産を中心にその魅力を捉えていました。しかし、活動を重ねる中で、その魅力は目に見えるものととどまらず、目に見えない部分にも深く息づいていることを実感しました。例えば、「あかり展」や「浜通りフェスティバル」などで地域の方々や触れ合い、その笑顔と共に語られる浜通りの魅力を聞いていると、ここに宿る強い愛情があるからこそ、この土地の文化や魅力は守られ、継承されていくのだと強く感じました。

有形無形、物質的・精神的な両面にわたる地域の魅力を広く伝えたいという思いから、私はフィールドワークに取り組んできました。少しでもその意義を果たすことができたのであれば、幸いです。

浜松市 浜松文芸館

私のまちの文芸世界

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(アート&マネジメント) 3年 白田奏美、小笠原凜、山本陽大

指導教員：○講師 占部史人、講師 立花由美子
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

浜松文芸館は、平成27年よりクリエート浜松内の4階および5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした施設。

館内では浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存し、収蔵品の常設展・企画展を開催している。身近に文芸を学ぶ・楽しむ場、文芸に触れ、多くの人々と語り合う場にふさわしい環境づくりを進めている。



クリエート浜松外観

これまでの活動

①広報活動

浜松文芸館の知名度向上を目的として、ポスターやチラシの作成を行った。特にポスターは新聞にも掲載され反響呼んだ。また、取り組んだ活動についての資料を施設内のショーケースに掲示し、毎年更新をしている。

②ワークショップの開催

若者に文芸の楽しさを知ってもらうために、様々なワークショップを開催した。
2年間連続で開催した「吟行DEススメ」では、“吟行×浜松×マップ”をテーマに、オリジナルマップを作成した。まち歩きを通して浜松の魅力を再発見することができた。

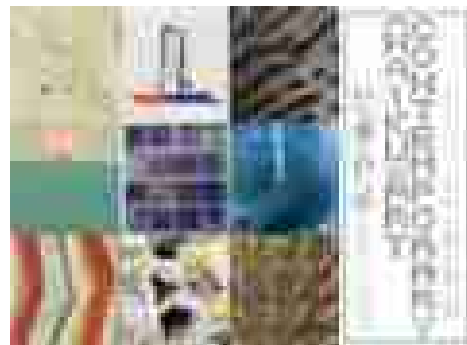
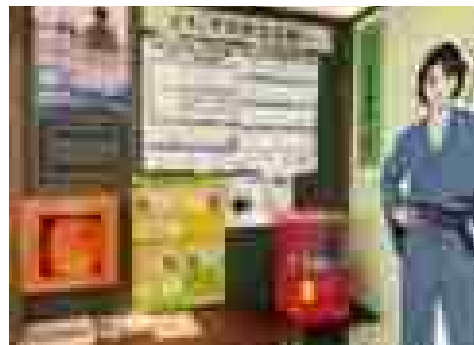
③俳句ガチャの設置

「俳句ガチャ」とは、“合作俳句”を気軽に体験できる企画である。クリエート浜松の1階と5階にガチャを設置することで、浜松文芸館への来場者を増やすことができた。リピーターの獲得もでき、今後もガチャの設置を維持していく予定である。

④オリジナルキャラクターの作成

⑤展覧会「Contemporary (Haiku) Art—現代(俳句)美術—」の開催

今まで行ってきた俳句と文芸の活動と、普段大学で学んでいるアート分野の知識・経験を生かした展覧会を開催した。キャプションなどの展示方法を工夫し、俳句とアートを融合した表現とより自由な美術鑑賞を実現することができた。



左：設置された俳句ガチャ
右：展覧会チラシ（表）



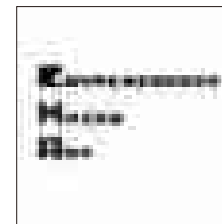
2024年度の活動について

・図録の制作

展覧会「Contemporary (Haiku) Art—現代(俳句)美術—」の様子をまとめた図録を制作した。
去年に行った展覧会を主に、その内容を通して今までのフィールドワーク活動全体を総括するような冊子を目指す。

刊行に向けた準備

- ・冊子の内容決め
- ・予算との擦り合わせ
- ・作品の解説文章の作成
- ・冊子デザインの作成



冊子の表紙



冊子の中表紙

学内ミーティングを繰り返し行い、どのような内容にすべきかを緻密に話し合った。
また冊子デザインは外部のデザイナーの方にも意見を伺い、より完成度の高い冊子となるように時間をかけた。

・ワークショップの手伝い

浜松文芸館で行っている読書感想文や絵本作りの子供向けワークショップに、ボランティアスタッフとして参加をした。
子供たちにも文芸の楽しさを知ってもらえるように、長時間のコミュニケーションを取りながら支援をする事ができた。

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

【小笠原凜】

1年生の頃は、生まれ育った静岡県内中部とはまた雰囲気の違いと文化や街並みの魅力を浜松市に感じ、新鮮な気持ちでフィールドワークに参加しました。

2年生のフィールドワークでは、展覧会の開催に挑戦しました。自分達の手で展覧会を運営する大変さがありましたが、フィールドワークメンバー全員が自ら作製した作品を展示し、個々の得意を活かすことで、私達にしかできない展覧会にすることができました。

3年生では、展覧会の図録デザインを担当させていただきました。メンバーや占部先生と相談しながら制作する中で、過去のフィールドワーク活動について振り返る機会ができ、最後の一年としてふさわしい時間にすることができました。

どの年でも、文芸館の皆さんや浜松市の皆さんと関わる中で、地域での関係づくりの大切さを現場で学ばせていただきました。それはどの活動もたくさん方の協力があったことだったからです。素晴らしい機会をありがとうございました。

【白田奏美】

今まで、大学のある静岡市とは離れた浜松市で俳句や文芸に関わる活動を行ってきました。街の雰囲気も違う中で、違うからこそ気がつける浜松市の魅力やそこから生まれる文芸の楽しさを伝える方法について、試行錯誤しながら意味ある活動を行う事ができたと感じます。

特に、去年からの展覧会に関する活動では、私たちが直接関わっていなかった過去の企画なども含めた経験を活かし、文芸の魅力と地域の繋がりについて考え、行動に移す事ができました。

今年度は展覧会をまとめた冊子を作成しましたが、今までのフィールドワークの活動全てが元になり俳句の良さとは何か、そこからどう地域にアプローチしたのか、活動全体をまとめたような冊子が制作できました。本として形に残せることで、私たちの活動も後に残せるものになったのではないかと感じます。浜松文芸館フィールドとしての活動に様々な意味を見出せた三年間でした。

浜松市 佐久間町

交流の輪づくり～地域の魅力を後世へ～

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの

(地域経営) 3年 桑名瞭徳
(地域共生) 3年 金城奈津希
(アート&マネジメント) 3年 大木琴寧、佐藤萌

指導教員：○准教授 祝原豊、教授 江口昌克、教授 板倉美奈子、教授 正木祐史

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

川合花の舞保存会
静岡県立湖北高校佐久間分校
パンプキンレディース
佐久間市天竜区佐久間協働センター

地域概要

佐久間町は1956年、昭和の大合併により1町3村が合併して誕生し、さらに2005年には浜松市と合併したことで現在の浜松市天竜区佐久間町となった。人口は2,502人（令和7年1月1日現在）である。

浜松市北部、天竜川の流域に位置し豊かな自然とそれを利用した「佐久間ダム」や「蕎麦」などの名所・名産が特色。郷土を活性化させたいとアクティブに活動する方が多く、NPOや地域団体活動が盛んであり、多くの常設的な活動やイベントが行われている。

その中でも名産品が並び数多くの方が訪れる地域最大のイベント、「フェスタさくま」は新型コロナウイルスの影響で近年はオンライン開催となっていた。しかし、2023年より再び現地開催となり、以前と変わらぬ大きな盛り上がりを見せた。

少子高齢化や前年度のフィールドワーク報告より113人減少した人口などの問題は存在するが、それに負けず人の温かさを感じ、地域内の交流盛んな一地域である。

これまでの活動

【交流の輪づくり】

佐久間めぐりやイベントを通して出会った方々との関係を築き、様々な方々と交流を行った。私たち発の活動や魅力発見、これまで地域で行われてきた活動への参加など現地の方々と交流の輪を作り、人と関わるからこそできる活動を行った。

【ワークショップ】

上記活動の一環として、アワビの貝殻を用いたワークショップや秘密基地いもほりでのワークショップを開催した。イベント運営を行い交流の輪を広げるとともに、佐久間の特産や自然の魅力など活動の中で出会った佐久間の魅力を伝える事を重視した。

【サクッとさくま制作】

観光スポット・食べ物・人など、テーマごとに情報を詳しくまとめた広報誌サクッとさくまを作成。記事には地域の方へのインタビューや活動内容を掲載し、大学生視点での佐久間の魅力を取り上げている。完成品は印刷の上、佐久間の図書館や交流センターに設置させていただいている。

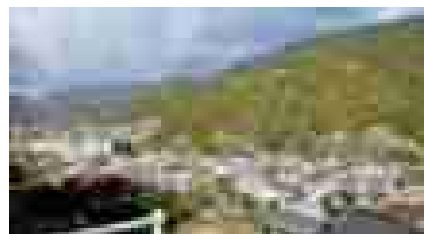
【SNSの広報】

Instagramを利用して広報活動を行った。静岡大学の学生や佐久間フィールドに興味のある方をターゲットにして活動報告と佐久間の紹介を投稿した。

【佐久間巡り】

佐久間ダムのような観光スポットのほか、街歩きを実施することで佐久間の魅力を探した。

特産であるそばを提供するお店を数店舗たずね、インタビューを重ねた。



佐久間



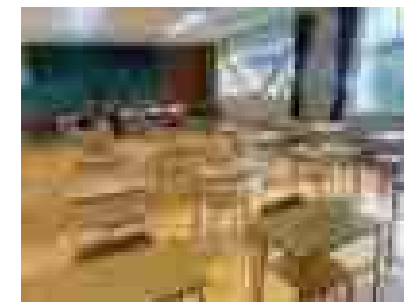
佐久間フィールド
Instagram



2024年度の活動について

【パンプキンレディースとの活動】

前年度やそれ以前に引き続き、パンプキンレディースさんと関わった。ごまちゃんに関するだけでなく佐久間全体の歴史に関するインタビューや、佐久間分校文化祭への出店のお手伝いなどを行った。佐久間分校文化祭では実地の販売によって、ごまちゃんが地域に根付いている、校文化祭の盛り上がりなどは勿論、パンプキンレディースさんの人手不足などの課題点も自らの肌で感じる事ができた。



佐久間分校

【川合花の舞】

川合地区で行われている、川合花の舞に参加した。川合花の舞は鎌倉時代に伝わったとされている伝統的な祭り。四ツや三ツ、榊鬼などと呼ばれる様々な種類の舞を八坂神社に奉納する。県の無形文化財にも登録されており例年多くの人が訪れる。フィールドワークでは、舞手と篠笛の吹き手として参加させていただいた。メンバーだけでは足りない人手をポスターやホームページの作成、声掛けなどを通じて学内から募集。結果集まった4人と共に9回の事前練習を行い、本番に臨んだ。10月に行われた本番ではボーズカの四ツとおかめの踊りに参加するとともに、それ以外の演目でも笛を担当。本番が終わった現在も、花の舞の存在を知らない人にもその魅力や歴史を伝えるために映像資料やサクッとさくまの制作を進めている。



ボランティア募集ポスター

【地域学授業】

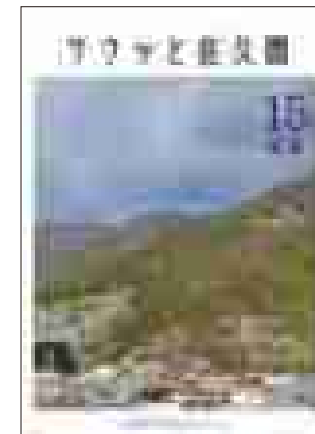
静岡県立浜松湖北高校佐久間分校にて、講師側で地域学の授業に参加させていただいた。佐久間分校では、地域学という授業があり、その中で私たちと似た地域創生活動を行っている。3年次には実地で、2年次にはそれに備えた座学を中心とした講義が行われており、今回私たちは2年生を対象にフィールドワーク活動を通じた成功・失敗体験についての講義と活動の中で得た議題を基にファシリテーションを行った。上記の花の舞と準備期間が被ってしまうなどの課題点もあったが、結果的に分校の生徒、フィールドワークメンバー双方に学びのある時間・場を作ることができた。ディスカッションでテーマとした浦川キャンプ場には出た案を共有し、さらなる交流の輪を広げられればと考えている。

【広報活動】

例年制作しているサクッとさくまを今年も刊行した。前期には昨年活動した秘密基地いもほりでのワークショップの様子を特集。後期には、パンプキンレディースさんとごまちゃんを特集。また、花の舞の特集やこれまでの活動を締めくくるとような最終号の作成を考えている。また、今年度はホームページの開設を行った。当初花の舞のボランティアを募集することを目的としていたが、佐久間フィールドの活動や花の舞などを紹介するサイトとして現在も運営している。

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

今年度は前期後期を通し、活動量もそれに比例し得るものも多かったように思う。前期にはパンプキンレディースさんとの活動と花の舞分校授業の計画を並行して立案。夏休み中に授業計画やボランティア募集ポスターの作成、後期に入ってから花の舞の事前練習それを踏まえての本番。2コマ100分の授業組み立て、本番。昨年まではいもほりに焦点を当てるなど比較的ひとつのことに力を入れる形式のフィールドワークであったが、本年は対象が増加したこともあり静岡市内などでの活動の機会も増加した。そのなかでも地域との関わり方や、自分たちの「佐久間の魅力を伝えたい・残したい」という原点に立ち返ること、社会と関わる中での事前準備の重要性など様々なことを考え、学ぶことができた。このフィールドワークは、授業としては今年で終わってしまう。しかし、佐久間の人々、魅力を知ってくれた地域外の方々、そして私たち静岡大学生の交流の輪を繋いでいきたい。



サクッとさくま

田園空間博物館 南遠州とうもんの里

子どもたちを呼び込むための環境づくり

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの

(地域経営) 3年 岩田啓佑
(地域共生) 3年 今西志帆、西村愛未
(アート&マネジメント) 3年 石上すみれ
(スポーツプロモーション) 3年 市川菜々

指導教員：○講師 川崎和也、教授 池田恵子、准教授 彭宇潔

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

NPO法人とうもんの会
蓮舟寺のみなさま

地域概要

「田園空間博物館南遠州とうもんの里総合案内所」（以下とうもんの里）は、掛川市の南西部にある施設である。掛川市・袋井市・磐田市の南部に広がる田園地帯を「とうもん」と呼ぶ。「とうもん」という言葉は、「稲面(とうも)」または、「田面(たおも)」がその由来とされている。美しい田園風景や豊かな自然、温かい地域の人々、伝統ある農村文化がとうもんの里の魅力である。

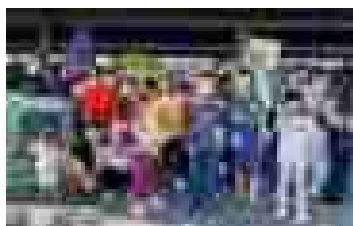
とうもんの里を運営するのが、2006年に地域住民らが中心となり設立した「NPO法人とうもんの会」である。とうもんの会は、とうもんの里を拠点に、農業体験、食加工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農産物・加工品のPR販売などの活動を行っている。こうした活動を通して、地域の農業や農村の魅力を伝え、とうもんの里を訪れる人々のふれあいを創り、農業の保全や地域活性化につなげることを目的としている。



とうもんの里の風景

これまでの活動

とうもんの里フィールドワークでは、「子どもたちを呼び込むための環境づくり」というテーマを掲げて、フィールドワークに取り組んでおり、地域の歴史、自然、伝統文化、農業、人々の暮らしといった、遠い昔から受け継いできたふるさとを“農業を知らない子どもたち”に繋げていくために、とうもんの里を通して地域の魅力発信を行ってきた。

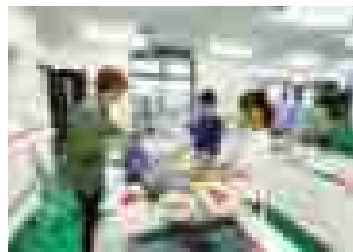


キッズフェス

とうもんの里に子供たちを呼び込むためにキッズフェスを行っている。自然豊かなとうもんの里で子供たちが楽しく活動し思い出に残るようなイベントを目指している。

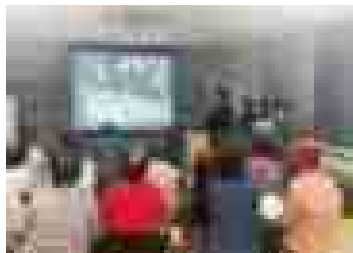
夕食作り

とうもんの里でお世話になっている名倉光子さんから料理の豆知識を教わりながら、全員で協力し、とうもんの里で売られている地元の食材を使い夕食作り！



報告会

毎年フィールドワークの最終回に地域の方々を対象として行う報告会。地域の方々にとうもんの里フィールドワークの活動と1年間協力の感謝を伝える。



2024年度の活動について

2024年度も夏と秋の2回行った。3年生5人という少人数でのイベント運営において、役割分担や事前準備を徹底し、他団体との連携やとうもんの会のサポートを活用することで無事に運営を行うことが出来た。

【夏のキッズフェス】

夏休み中の小学生・未就園児を対象としたイベントで、①農村の伝統文化を子どもたちに伝えること、②秋のキッズフェスの宣伝をすることを目的として企画をした。

午前中は宿題に取り組み、昼食はみんなで夏野菜カレーを食べた。午後からは、水遊びを行い、外で体を動かしながら楽しく遊ぶことができた。

子どもたちから「楽しかった」という声や、保護者の方から秋のキッズフェスも参加したいという声をいただき、目的を達成できたと言える。一方で、集客に関する反省と、参加者の年齢層と企画があっていなかったという反省があげられた。

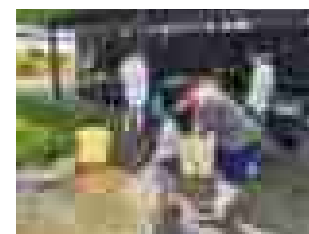
【秋のキッズフェス】

子どもたちに農村の魅力を伝えたいという思いから、子どもが全身で自然を感じながら遊び、思い出に残るようなイベントを目指した。

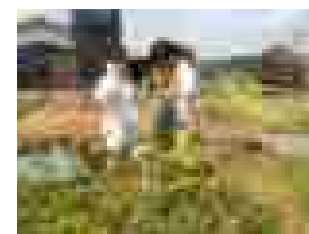
今年度は、昨年度以上にとうもんの里の自然空間を活かし、年齢に関係なく全員が参加できる遊びを取り入れた。また、遊びのブースを屋外に移動させることで、より自然を感じられるようになった。昨年度に引き続き、常葉大学こども健康学科のボランティアサークル「SUN & leaf」と連携した。子どもに関する専門知識や豊富な経験を活かして、子どもの興味を引き出したり、音楽やダンスなど幅広い分野の遊びを提供したりすることができた。

イベント後に行ったアンケートからは「充実した一日になった」「次回があれば参加したい」などの意見をいただいた。夏のキッズフェスなどから継続してイベントに参加してくださった親子の姿も見られた。フィールドワークの活動として地域に残すことができたのではないかと感じている。

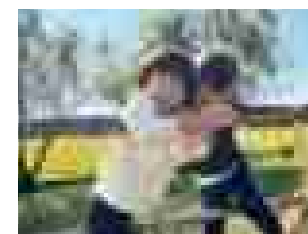
フィールドワークとしてのキッズフェスは今年度で終了するが、他団体と連携を測ってきたことで、活動の引き継ぎという新たな可能性も見つけることができた。



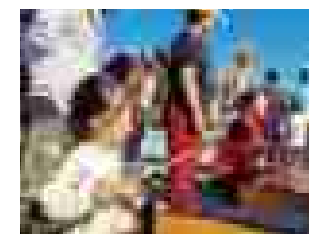
【夏】水遊びの様子



【夏】井戸の水くみに挑戦



【秋】笑小屋で遊ぶ様子



【秋】音楽ブース

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

【石上すみれ】

とうもんの里で活動したことは、自然と文化、食の密接なつながりを学ぶ機会となりました。子どもたちがとうもんの自然の中で自由に走り、笑小屋によじのぼる姿が印象深いです。私たちの活動が子どもたちの記憶に少しでも残っていると嬉しいです。

【市川菜々】

地域の特徴を活かしたイベントを作り上げる工夫や、目的をチーム全員で共有する重要性、さらに外部への効果的な発信方法について学びました。最終的に全員が責任感を持ち、楽しく取り組めることができ、人としても成長することが出来ました。

【今西志帆】

地域の方々の温かさや思いに触れ、自分も貢献したいと学ぶ意欲が湧いた活動でした。とうもんの自然に癒されながら、企画の工夫や配慮、グループワークを通じて多くを学び、大きく成長できました。

【岩田啓佑】

イベントの企画を通じて、地域の方や他大学の学生など、他者を巻き込む大変さを実感した。それと同時に、「農村の魅力を子ども達に伝える」という一つの目的のもと、他者との協働によって事を成し遂げたこと、地域に活力を生むきっかけづくりができたことに喜びを感じた。

【西村愛未】

私は、とうもんの里でイベント企画のポイントについて学ぶことができました。名倉さんから5W2Hについて教わり、企画を行う「目的」を指す「Why」を考えることがなによりも重要であることを理解しました。この学びを卒業研究でも活かしたいと思います。

御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

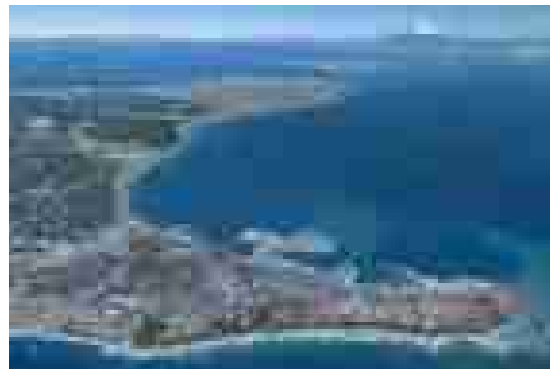
メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(スポーツプロモーション) 3年 勝亦彩乃、小出康士郎、横山透真
指導教員：○講師 平嶋裕輔、教授 水谷洋一、講師 川崎和也
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
御前崎市総務部企画政策課
御前崎市観光協会
公益財団法人御前崎市振興公社

地域概要

夢と希望のあふれるまち御前崎

人口：29024人(令和6年12月末)
2004年4月1日、御前崎町と浜岡町が合併して御前崎市が誕生。
市内には「浜岡砂丘」や「御前崎灯台」のほか、「御前崎マリ
ンパーク」「海鮮なぶら市場」「あらさわふる里公園」など、さま
ざまな名所・施設がある。また年日照時間が国内で最も長いな
ど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサー
フィンの世界大会も開催されている。
御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域
経済の縮小・衰退などの諸問題に直面している。2045年には住民の5割近くが65歳以上の高齢者になると予想され、
その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題も懸念さ
れる。
それらの問題に対して、御前崎市では、①『活力』のある仕事・人材づくり、②『魅力』あふれる発信・交流づく
り、③『希望』ある子育て・活躍の場づくり、④『安心』ある地域づくりの4つを基本戦略に掲げて、市民・行政・
企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。



これまでの活動

スポーツフィールドワークとして

国と御前崎市との地方創生推進事業である「御前崎スポーツ振興プロジェクト」と連携して、御前崎市でフィール
ドワークを行ってきた。昨年度まではスポーツを中心に施設、名所を視察、イベントの開催などを通して、御前崎市の
地域活性化に取り組んできた。



「マリンスポーツフェスタ」
カヌーやボートをはじめとするイ
ベントの運営補助をさせていただ
いた。天気が良く、とてもきれいな海
があるという御前崎市の魅力を再確
認することができ、良い経験となっ
た。



「インクルーシブサッカーフェスタ」
性別、年齢、障害の有無など関係
なく、サッカーを通じて楽しく交流
することを目的として実施した。50
名を超える小学生が参加し、大いに
盛り上がった。



「桜まつり」
ニュースポーツのモルックの体験
ブースを出店した。ほとんどの方が
初めて知るスポーツであったが、ルー
ルを理解した上で本気で楽しんでく
れた。老若男女が笑顔になれる非常
に良い時間であった。



2024年度の活動について

御前崎市は市制20周年、そして特産品である干し芋誕生より200年のこの節目の年に、「干し芋プロジェクト」を始
動。スポーツを中心に活動を行ってきた私たちもこのプロジェクトの力になりたいと考え、協同させていただ
いた。

〈御前崎市干し芋農家 齋藤丈雄さんインタビュー〉

御前崎市の伝説的サツマイモ農家であり、干し芋生産の第一人者である、齋
藤丈雄さんにインタビューを行った。
干し芋の作り方はもちろん、生産する上で大変なことや、日本の農業の未来
など、様々なことを熱く語っていただいた。



〈下村勝市長インタビュー〉

市長にインタビューをするという貴重な経験をさせていただいた。めったに
ない機会であったためとても緊張したが、市長が話しやすい雰囲気を作ってく
ださり、有意義な時間となった。
インタビューでは、このプロジェクトに対する市長の思いを伺うことができ
た。

〈11/23.24 御前崎市大産業まつり〉

資料で調べたことやインタビューで伺ったことを元に、ポスターを制作した。
多くの方に立ち止まっていただき、地域の方とたくさん交流することができた。
御前崎市の温かさ、魅力に触れられた2日間だった。



これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

活動を通して、気候、立地、人柄など多くの魅力を肌で感じる事が出来たと思います。特に、最後にお手伝いさ
せていただいた御前崎市産業祭では、これまで活動してきて触れてきた魅力に加えて、御前崎市の方の地元愛を強く
感じる事ができて、すごく温かい地域だなと改めて感じました。こういった地域にしかないのどかさなど、御前崎
市ならではの良さをこれからも残していきたいと思いました。

横山透真

今年はスポーツにとらわれず、産業の面から新たな魅力を発見することが出来ました。今までの活動とは異なる世
代の方や個性のある方と関わらせて頂き、地域に対する熱い思いなど、様々なことを感じました。これからも御前
崎市の素晴らしい文化や新たなスポーツの形、交流の仕方などを継続して発信して欲しいなと思っています。

勝亦彩乃

私たちはスポーツフィールドワークとして、御前崎市の魅力を発見・発信しようと取り組んできました。この2年
半での数値的な成果と言われると、正直なところ大きいものは得られていないのかもしれませんが。しかし私たち大学
生が御前崎市という市の魅力に気づき、地元の方々と和気あいあいと交流し、笑顔の輪が広がったことは、少し傲慢
ですが大きな成果と言えるのではないかと思います。今後フィールドワークが終わっても、御前崎市で得た経験を活
かしていきたいです。

小出康士郎

謝辞

御前崎市総務部企画政策課様、御前崎市観光協会様、公益財団法人御前崎市振興公社様、御前崎市役所様、のれん
会様、電源地域振興センター様、並びに本活動の遂行に協力してくださったすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの

(地域共生) 3年 古田采音
(地域経営) 3年 松岡大輝
(アート&マネジメント) 3年 梅田夏希

指導教員：○教授 牛場智、准教授 原田賢治、教授 太田隆之

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

松崎町企画観光課
松崎町総務課
松崎2030プロジェクト
静岡県立松崎高等学校
松崎町商店街
せんと

地域概要

松崎町は人口約5,500人の、西伊豆エリアに位置する町で、静岡大学からはバスで約2時間半で行くことができます。「花とロマンの里」というキャッチフレーズで知られると共に「日本で最も美しい村連合」の加盟地域であり、歴史と自然が調和、美しい景観の保護や発信の活動が盛んに行われています。

春になると、川沿いに咲き乱れる桜や田んぼを活用した花畑を見渡すことができ、温かな気持ちになります。石部の棚田は、平成12年に耕作放棄地を再生した事例で、現在多様な情緒ある風景を見ることができます。私たちは、伝統的工法で保存されるなまこ壁が立ち並ぶ商店街を中心に活動しています。

また、松崎町では桜葉の生産量が日本で、全国シェアの約7割を占めます。町内では桜葉餅などに使用され、親しまれています。また、豊富な海の幸、川のり、栄久ポンカンなど季節を問わず食を堪能することができます。

「2030松崎プロジェクト」では、ツーリズムや農業等のグループが、各面の松崎町の課題からゴールを設定し、官民一体となった活動が行われています。2024年度は、2030松崎プロジェクトと密に連携しながら、1・2ヶ月に1回の頻度でフィールドワークを実施しました。

これまでの活動

□ 2022年度までの活動



イベントへの参加

棚田のライトアップイベントや棚田フェス、秋まつりなどに参加し、松崎町内外の方々との交流を深め、松崎の伝統を体験しました。

中高生との交流

松崎中学校、松崎高校の生徒とワークショップを行い、松崎町の魅力や課題について話し合う機会を設けました。また、松崎高校の文化祭に参加するなど、松崎町の若者とのつながりも大事にしています。



魅力発信

商店街の方々との交流を通してインタビューを行い、店主さんたちの素敵な人柄に焦点を当てた商店街パンフレット「てんしゅさんぽ」を作成しました。

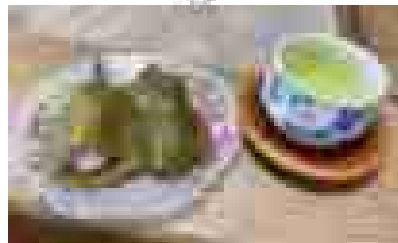
□ 2023年度の活動

高校生の放課後居場所づくり

「松崎町に持続するものを残したい」という考えから、松崎高校の有志生徒と協働で元お惣菜店「せんと」をコミュニティスペースに改修する活動を始めました。「せんと」周辺地域の不用品回収を行い、机や椅子の整備を行いました。



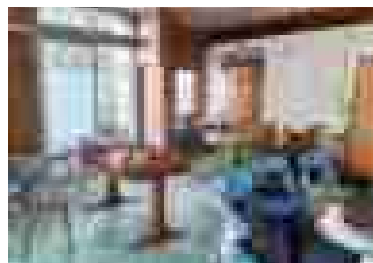
▲なまこ壁



▲桜葉餅



▲パンフレット表紙



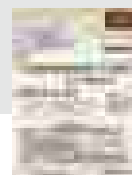
▲備品整備後のせんとの様子

2024年度の活動について

本年度は「せんと」に「PRESENT」という名前をつけ、コミュニティスペースとしていく活動を行いました。

□ 7月 コミュニティカフェ

「PRESENT」プレオープンイベントとしてコミュニティカフェを実施しました。

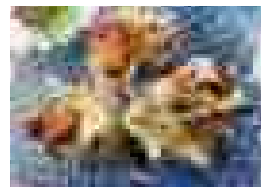


〈目的〉

- ・「PRESENT」を地域の皆さんに知ってもらうこと。

〈結果〉

- ・2030プロジェクトの先生方にも、スイカ割りやピアノ演奏などの内容をご用意頂き、地域の方がイベントに参加するきっかけになりました。
- ・回覧板を見て来て頂いた移住者の方、お散歩中の親子など様々な方にご参加頂きました。
- ・お子さんと高校生・大学生がお絵かきやカードゲームで遊び、多世代交流の場となりました。



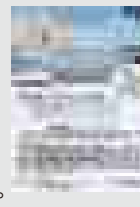
◀サザエのお刺身



スイカ割りの様子▶

□ 10月・11月 西豆学

松崎高校の探求活動である「西豆学」に、2030松崎プロジェクトの「カフェ班」と協働で関わらせて頂きました。
“まちのお気に入りマップづくり”を行い、観光地にこだわらない、地域に暮らす高校生ならではの視点でのマップを作成しました。

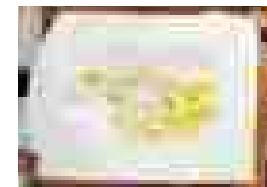


〈目的〉

- ・松崎町で行うコミュニティづくりの一例として高校生にご紹介すること。
- ・「PRESENT」を利用して、誰でも参加出来るイベントを開催すること。

〈結果〉

- ・松崎・西伊豆・南伊豆の3グループに分かれ、計3回の授業でマップを完成させました。
- ・チームごと非常に個性のあるマップが出来上がりました。
- ・数名の地域住民の方にもご参加頂きました。
- ・今後探求テーマを決める高校生にとって、地域を見つめ直すきっかけになったと考えました。



◀南伊豆グループのマップ
(野生動物の出現数は付箋に書ききれず、マップ上に大きく書いているのが特徴的)

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

●私たちのフィールドワークの活動が終わった後に、居場所をどう持続していくことが出来るのか、松崎町に何える回数や予算に制約もあり、人数も少ない中で、正直不安の多い1年でした。イベントの準備も、多方面への連絡やポスターの製作など、とても大変でした。しかし、「せんと」の深澤様がかけてくれた「まずは楽しんで何でもやってみたら良いんだよ、失敗しても良いんだよ」という言葉に、常に支えられていました。協働活動させて頂いた松崎2030プロジェクトの先生方にも、松崎町に行かなければ出来ない準備を行って頂いたり、休日にも関わらずイベントに参加して頂いたり、と、たくさんのご支援を頂きました。こうした皆様や、地域の皆様の暖かさを糧にして、各活動を達成することが出来ましたし、外部から地域に参入するとはどういうことなのか、あるべき姿勢を学びました。フィールドワークが終わった後も、「PRESENT」の責任は、私たちが持ち続ける必要があると考えています。定期的にご連絡をし続けると共に、参加出来る機会にはPRESENTでの活動に関わりたくと考えています。

松崎町の穏やかで優しい空気が大好きです。本当にありがとうございました！

古田采音●

●私が松崎町を知ったのは、2022年度先輩方が作成した「てんしゅさんぽ」でした。そこから初めて松崎商店街を訪れ、人々のつながりや営みの一端に触れることができました。そして2023年度からは、高校生が気軽に立ち寄れる居場所として「せんと」の設置を目指して活動を始めました。その過程で、高校生や地域住民の声を聞き、松崎町にいない時の街の様子や課題についても学ぶことができました。残念ながら、私たちは松崎町フィールドワーク最後の代となってしまいましたが、この1年間、私たちは居場所を松崎町に残すことを目指し、地域イベントへの参加を通じて、より多くの人々と交流を深めることができました。目標達成について語ることはできませんが、居場所が地域に息づく存在であり続けることを願っています。最後に、松崎町の温かい方々に支えられながら活動できたことを大変嬉しく、誇りに思っています。大学としての関わりは終わりますが、また必ず遊びに、そして釣りに訪れます。

松岡大輝●

●以前は先輩方が、松崎高校とのつながり、イベントなどを進めてくれていて、私たちは今年、先輩たちが繋げてくれた松崎高校とのつながりを数々の活動を通してより深く、興味深いものにできたと思っています。松崎高校との活動を進めていく上で、思いがけない地域の人との出会いや、面白い話が聞けたり、実際に近くでイベントを進め、対話をしていて、この松崎町の人たちの温かさ、地域のつながりの深さ、生活や、彼らの地元への深い愛情などがヒシヒシと伝わってきました。実際に松崎町に足を運んで対話をしないと出会えないその人の暖かさ、土地への愛を感じることができたことは貴重で素晴らしい体験です。こちらの立場としても、人との関わりを通じて、静岡大学での学びや、大学生として教えられること、コミュニケーションで私たちにしかできない温かい関わりを提供できたことと自負しています。今年でこの活動が終わってしまうのはとても名残惜しいですが、活動の中で築いてきた松崎町という街とそこに住んでいる人たち、そして私たちの思いは決してなくなりませんと信じています。総じて自分にとって大きく成長できた一年の活動でした。

梅田夏希●

松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(地域環境・防災) 3年 前川愛依、吉田さくら
(アート&マネジメント) 3年 廣沢希実

指導教員：○准教授 原田賢治、准教授 山本隆太
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課
松崎町立松崎小学校
松崎町立松崎中学校
静岡県立松崎高等学校
松崎町東区・西区・南区・北区・中区・宮内区のみなさま
企業組合松崎桑葉ファーム

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、観光地として有名な港町である。

しかし、海沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には約7分で最大15mという大きな津波被害が想定されている。町内は細い道が多く、高齢化も著しいことからソフト・ハード面ともに防災施策への取り組みが急務である。



これまでの活動



防災訓練の実施

松崎町西区の津波避難タワーへ避難する地区において、地震発生時に通れなくなる恐れのある狭い道を封鎖して避難訓練を行い、津波避難タワーの設備紹介を行った。

災害時を意識した行動の促進と、防災施設の把握により災害時の住民の主体的な対応力を向上させる目的で行ったが、実際には防災施設や用具の使い方を把握していない住民が多かったため、緊急時に誰でも使えるような普及活動を行う必要性があると分かった。



観光防災マップの作成

2020年度に松崎町西区・中区・北区の住民のクチコミを元に、避難時の危険箇所や要注意箇所を掲載した防災マップを作成。

2021年度には、観光と防災を一体化したオンラインマップを制作し、観光地の分かりやすさを向上。施設の防災情報に加え、避難経路を動画・画像で示し、避難の手助けとなる内容にした。



Webスタンプラリーの実施

松崎町に住んでいる人々に町の魅力を再発見してもらう目的の下、町内の小学生を対象にした「まつざき魅力発見！webスタンプラリー」を実施した。

スタンプラリーの対象地決定のために、町内の主な観光地の訪問や町内の小学生に対する観光地の認知度アンケートを行った。

2024年度の活動について



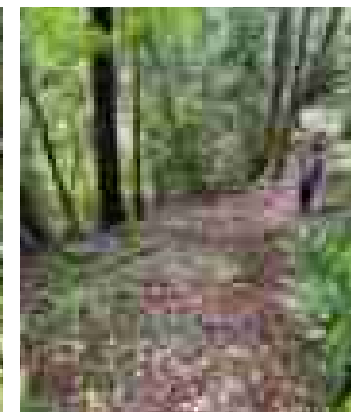
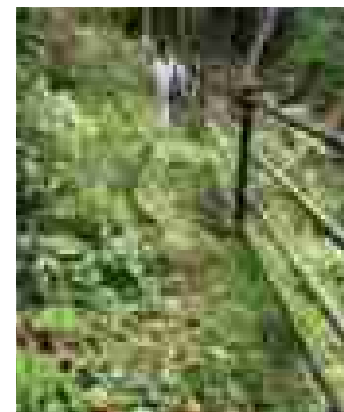
【特産品を使用した商品パッケージの刷新】

松崎町の特産品である桑葉を使用した「伊豆の桑葉パウダーうどん」「伊豆の桑葉パウダーそば」(以下、桑葉うどん・桑葉そば)の商品パッケージデザイン案の作成に携わった。店頭での視認性が低いという課題を解決するため、デザインの提案を行い、昨年9月に完成。現在は店頭販売されており、多くの方に喜ばれていることから、観光振興にも貢献できたと感じている。

【津波避難に関する調査活動】

津波発生時に松崎町の住民の命を守る目的の下、津波避難に関する課題を明らかにする調査活動を行った。

具体的には、調査対象区(東区・西区・南区・北区・中区・宮内区)にある津波避難場所の視察を行った。また、各区の区長および防災委員の方々に対してヒアリング調査を行い、避難訓練の実施方法や避難の支援体制の課題点を把握した。加えて、松崎町総務課消防防災係の職員の方から資料を共有していただき、松崎町の津波避難の現状を具体的に理解することができた。



これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

松崎町役場や企業、松崎町の住民の方との対話を大切にしながらフィールドワークに取り組んだ。その中で、沢山のあたたかいお言葉をいただき、励まされながら活動を継続することができた。今日まで、私たちに「地域づくりへの挑戦をする機会」を設けてくださった松崎町の皆様に心から感謝している。(吉田さくら)

地域の課題解決に取り組むという貴重な経験をさせていただき、「やりっぱなしで終わるのではなく、次にどう繋げていくのか」という取り組みを循環させていくことの重要性を学んだ。心よく私たちを受け入れてくださった地域の皆様のあたたかさに深く感謝し、この経験を今後の成長に活かしていきたい。(前川愛依)

約2年間にわたり地域と深く関わり、取り組みの考案から実行まで行い貢献するという貴重な経験を得ることができた。どの活動も地域の方々の協力なしには実現できなかったものであり、その支えに非常に感謝している。フィールドワークを通じて得た学びを今後の活動に活かしていきたい。(廣沢希実)

東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの

(地域経営) 3年 佐藤正樹

(地域共生) 3年 菊地美瑚

(アート&マネジメント) 3年 入井優希奈、竹田朱里

(スポーツプロモーション) 3年 森千紘

指導教員：○特任教授 阿部耕也、准教授 山本隆太、講師 内山智尋

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

合同会社so-an

地域概要

東伊豆町は伊豆半島東部に位置する漁村である。私たちが主に活動の拠点としている稲取地区は海と山に囲まれた豊かな自然環境と温泉という観光資源を持ち合わせ、多くの観光客が訪れる町である。朝市では、地域の特産品を使用した商品が売り出されており、観光客や地域住民で賑わう活気ある場所となっている。

稲取は雛の吊るし飾り発祥の地である。毎年1月20日から3月31日にかけて「雛の吊るし飾り祭り」が開催されている。素戔鳴（すさのお）神社では、神社の118段の階段に雛人形と雛の吊るし飾りが飾られている景色が見られ、カメラを片手に多くの方がその景色を楽しんでいる。

また、若者の挑戦を応援している街であり、活動の際は多くの地域住民の方に興味を持っていただき、協力をいただいている。

受け入れ先の代表である荒武様は稲取の日常的な風景に魅力を感じ、これからも守っていくために空き家改修・活用を行っている。東伊豆は移住者率が高いものの、高齢者が多く子供の数が少ない。その現状をどう改善していくかがこれからの課題である。町としては子育て支援に力を入れており「ベビーファースト宣言」や「保育留学事業」を行っている。関係人口をどう増やすかがカギを握る。

これまでの活動

東伊豆学生サミット（各年）

東伊豆で活動する他大学の学生や稲取高校の生徒と交流し、地域活動の報告や今後の展望について意見交換を実施。

ダイロク通信（各月）

フィールドワークの活動内容を地域の情報紙「ダイロク通信」に掲載し、地域の皆さんへ発信。

何でも屋（2023年）

町役場や地元の和菓子店、農家などでお手伝いを行い、地域住民との交流を深めた。

成立学園高校合同フィールドワーク（2023年）

東京の高校生に地方国公立大学への進学を考えるきっかけを提供すると同時に、稲取の魅力を高校生の視点から新たに発見する活動を実施。

朝市前看板作成（2023年）

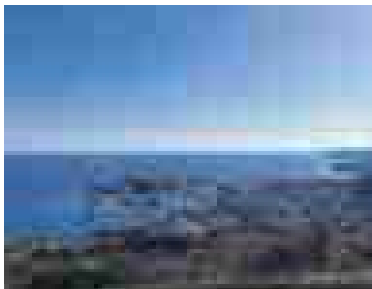
朝市の会場に設置する看板をデザイン・作成し、地域のにぎわいづくりに貢献。

シャッターアートの作成（2023年）

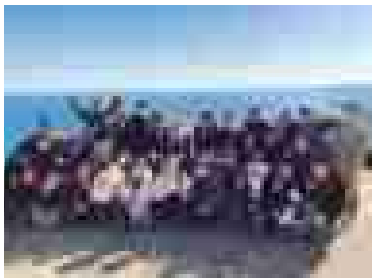
地元の飲食店のシャッターにアートデザインを施し、街の景観を彩った。

東伊豆魅力発見大学校（2024年）

旧稲取幼稚園を活用し、地域の方々に東伊豆の魅力を再発見してもらうイベント。地域事業者や地域おこし協力隊、学生などの協力を得て、各教室を「教科」に見立てた体験型企画を実施した。イベントでは、地域の特産品が並ぶ購買部やいちご大福づくり、動物ふれあい体験、雛のつるし飾り制作など、地域の文化・自然・スポーツを楽しむ多様なプログラムを展開。また、伊豆半島ジオパークの学習やオンラインオープンキャンパスを通じて、地域の魅力を深く知る機会を提供した。さらに、東京都の成立学園高校の学生との合同フィールドワークを行い、イベント運営にも協力していただいた。地域の若者と外部の学生が交流し、新たな視点から東伊豆の魅力を発見する場となった。地域資源の活用方法を提案し、東伊豆の未来を担う次世代とのつながりを築いた。



東伊豆町の様子



成立学園高校合同フィールドワーク



シャッターアートの作成



東伊豆魅力発見大学校

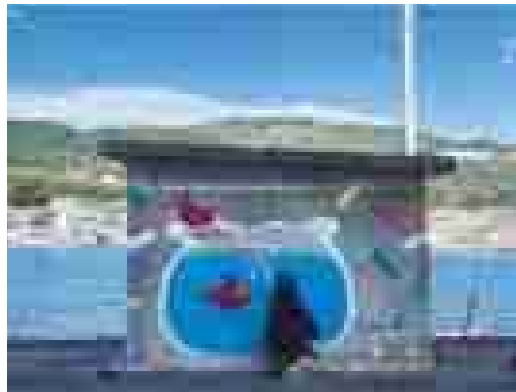
2024年度の活動について

私たちの代だけになってはじめてのフィールドワークでは、まず「Green Forest festival」を訪れた。来場者目線でイベントの良い点を吸収することができた良い機会であった。昨年度自分たちが企画実行したイベントである「東伊豆魅力大発見」の反省点を見つめ直し、比較することで学びを得た。次に、昨年お世話になった方々から話を聞きミーティングを重ねることにより、フィールドワークの最終着地点についての見解を深めていった。4回目のフィールドワークでは、役場から依頼を受けた巻き上げ機3体のペイントを行った。地域の方々との交流を交えながら楽しく作業を行い、2日間という短時間で3体全ての色付けを終えることができた。

最後のフィールドワークでは旧稲取幼稚園をお借りして行う学生主体のイベントを開催する予定だ。今まで静大生たちが活動してきたことや、協力してくださった地域の方々への感謝、そして活動することができた喜びを伝えられるようなイベントにしたいと考えている。



巻き上げ機のペイント前の様子



巻き上げ機のペイント後の様子

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

入井優希奈（アート&マネジメントコース）

フィールドワークの活動によって、私にとっての故郷と呼べる町が一つ増えた。これは、生まれた場所や育った場所、両親の故郷、それぞれが異なる環境であった私の大きな財産となる出来事となった。今まで活動を行ってきた約2年間で、関わる人、あいさつを交わす人、SNS上で会話した人は着実に増えていった。特にここ半年は、地域の今まで関わってきた方から依頼され生まれる活動もより多くなっていた。ガラガラと自分の「故郷」という概念が崩れていったのを感じた。近年、私を含め多くの人々が抱えている孤独を少しでも解消することのできる方法は、帰属意識を持てる場を一つでも増やすことである。東伊豆には、私のように一人彷徨う人々を受け入れる環境が存在する。その貴重な存在として、東伊豆という「故郷」を頼りに自分の道を進んでいきたい。

菊地美瑚（地域サステナビリティコース地域共生分野）

イベントがあった、看板ができた、たまに見かける若い子たちがまたいた。きっかけは何であれ、地域で長く活動していくには地域の人たちに少しでも私たちの存在を知ってもらい、理解してもらう必要がある。現地での活動を重ね、私たちは着実につながりの輪を広げ、関係を深めていった。その過程で様々な苦楽を仲間たちと共有し合った。対面することで感じられる人の温かさや、繰り広げられる議論があり、人と“直接”関わるという事の重要性を痛感した。東伊豆が「何事にも挑戦できる環境」であったからこそ、自身の成長や学びがあまりにも多くあったのだらうと感じる。

佐藤正樹（地域サステナビリティコース地域経営分野）

フィールドワークでの活動は、座学にはない学びを多くの機会でも多くの視点から吸収するものであった。長期に渡る活動の中で、活動に対する気持ちの変化やその変化の要因について個人でもチームでも時間をかけて考えた。東伊豆には学生を応援してくださる方々が多く存在する。その方々の存在がフィールドワークへのモチベーションを高め、東伊豆に関わる時間が楽しいものであった要因だと考える。そのような挑戦する環境で楽しいことに全力で取り組めた経験は自らの財産であると同時に、次の挑戦につながる契機でもある。

竹田朱里（アート&マネジメントコース）

「東伊豆」という自分の生活と全く関係のなかった地域と静岡大学フィールドワークという機会を通じて関わりを持つことができたことが、とても喜ばしいことであり、この縁に感謝したいと思っています。活動をしていく中で、地域の方々から温かい言葉をかけて頂いたり、新しい出会いや交流が生まれたりする瞬間はかけがえのないひと時だったと感じています。学生主体で企画立案することの難しさを活動を通して実感し、自分自身を成長させることができました。フィールドワーク終了と同時に東伊豆に行くことができる機会が少なくなってしまうけれど、また戻ってきたいと思わせてくれるような地域でした。この場で築いたものを大切にしたい。

森千紘（スポーツプロモーションコース）

東伊豆は自由度の高いフィールドであり、私たち学生の主体性が求められていたと感じた。そのため、何をしたら地域のためになり、私たちのやりたいことも叶えられるのか迷うことも多かった。ミーティングも定期的に行うことで、方向性についても話し合い、チームで共通認識を持ってから実地で活動することができた。また、東伊豆で活動していると、住民の方から暖かい声をかけられ、嬉しく思うとともに、支えられていることに気づいた。フィールドワークで関わっていただいた皆様に感謝の気持ちを届けられるように最後のイベントに取り組みたい。

伊豆半島全域（ジオパーク）

地域づくりとジオパーク

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(地域経営) 3年 沼井俊人
(地域環境・防災) 3年 福本奈穂
(スポーツプロモーション) 3年 森万穂里

指導教員：○准教授 山本隆太、講師 内山智尋
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
一般社団法人美しい伊豆創造センター ジオパーク推進部
伊豆半島ジオガイド協会
静岡県賀茂地域局
ふらっと月ヶ瀬
有限会社オートクラフト・IZU
スルガ銀行株式会社
株式会社伊豆バス

地域概要

伊豆半島は、静岡県東部に位置する火山によって形作られた半島である。漁業が盛んな伊東や西伊豆、温泉観光地である修善寺や熱海などがあり、2018年4月には伊豆半島内の15市町による取り組みがユネスコ世界ジオパークに認定された。ジオパークとは、地形や地質またそこに根づく文化や伝統を保全・活用していく場であり、日本国内では現在、ユネスコ世界ジオパークに10か所が認定されている。

伊豆半島ジオパークは、現在もプレートの動きによって地殻変動を続けており、火山や地震による様々な地形や資源がみられる。

私たちは、2015年の国連サミットで採択されたSDGsの「誰一人も残さない」という理念に基づいて、伊豆半島ジオパークを活用した自然の保護保全をベースとしながら、地域社会の産業、福祉、教育へと連続する一連の活動を行っている。



これまでの活動

1年目 (2017年度)	☆ジオパークについての学習 ☆ジオガイドとのワークショップ ☆パンフレット作り	2年目 (2018年度)	☆SDGs 肉まんの開発 ☆ジオパン開発、販売支援 ☆郷土料理についての学習
3年目 (2019年度)	☆大学生を対象としたツアーの開設 ☆VR動画を利用した学習教材の開発 ☆食育教材の作成	4年目 (2020年度)	☆伊豆：サイクリングルートの開発 ☆西伊豆：オンラインジオツアーの開発 ☆1年生へのガイドツアーの実施
5年目 (2021年度)	☆松崎：ジオ・クア・ウォーキングの実施 ☆伊豆半島ジオパーク推進協議会と 静岡県温泉協会イベント支援 ☆三島：高校生まちあるきの実施	6年目 (2022年度)	☆伊東：漁業ワークショップの開催 ☆修善寺：防災サイトの使い方講座 ☆中伊豆×焼津：静岡おくみゆプロジェクトの実施 ☆伊豆：狩野城の御城印デザイン作成
7年目 (2023年度)	☆スルガ銀行主催 e-bike ツアーガイド ☆中部 EPO SDGs 学生サミット	☆おもしろ自転車 × ふらっと月ヶ瀬	

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

沼井：当初はジオパークや伊豆半島についての知識がゼロの状態でしたが、この2年半のFW活動を通じて伊豆半島やジオパークの魅力に大きく気づくことができました。自分自身がこの伊豆半島を感じることができたことをきっかけに、今度は自分が誰かに伊豆半島やジオパークの魅力を発信できる人になりたいと感じています。

森：私たちのフィールドでは、地域経営分野・地域防災分野・スポーツ分野の三つの分野の学生が所属しており、自分の分野以外の活動にも携わることができました。そのため、別視点から見た地域課題を考えるなどの新たな発見が多く、ジオパークについてより探求を深めることが出来ました。今後も多くの視点から物事を捉え、地域課題の解決に関して考えていきたいです。

福本：最初は何も知らない土地で自分達に何ができるのかわからず不安でしたが、地域の方々と関わる中で自然と地域への愛着が湧き、フィールドワークが終わっても関わりたいと思うようになりました。また、この地域で問題とされていることは他地域でも重要視されていることであるため、ジオパークフィールドで学んだ問題解決への取り組みを今後にも活かしていきたいです。



2024年度の活動について

【ふらっと月ヶ瀬防災イベント（福本）】

☆2024年6月15日に伊豆市の月ヶ瀬地区にある複合施設ふらっと月ヶ瀬にて防災啓発イベントを開催！



イベントのチラシ

活動内容

月ヶ瀬地区地域づくり協議会の方々、ふらっと月ヶ瀬の職員の方々、伊豆市危機管理課の方々にご協力いただき、防災イベントを開催した。

当日は70名ほどが参加し、避難所運営体験・救急救命訓練・消火訓練・消防車の見学、非常食の試食など5つのブースを設け、参加者が自由に回る形で開催した。

事後アンケートの結果、「月ヶ瀬地区以外でも開催して欲しい」「定期的に開催して欲しい」「防災の大切さを感じた」など前向きな意見をいただいた。

一方、準備が開催ギリギリになってしまう、企画を立てる際双方の意見がすりあわせられていないなど課題も多く残った。このことから先を見通して計画を立てるとともに、事前の打ち合わせにおいて双方の考えを確認することが必要であることを再確認した。

※ふらっと月ヶ瀬：高齢者施設、こども園、障がい者施設、カフェで構成されている複合施設。また、地域住民の方々が交流する貴重な場。

【インクルーシブ自転車を活用した、高齢者介護予防教室（森）】

☆2024年10月27日に伊豆市の中伊豆温泉病院にて、インクルーシブ自転車を活用した、高齢者介護予防教室を開催!!

概要

2024年10月27日に、伊豆市中伊豆温泉病院リハビリコースにて、インクルーシブ自転車を活用した高齢者介護予防教室を開催した。2023年度の活動でインクルーシブ自転車を活用したイベントを行った際に大人が子供に遠慮してしまう様子が見られ、後のアンケート調査でも「もっと乗りがかった」という声をいただいたことから、大人向けのインクルーシブ自転車を活用したイベントの実施に至った。

活動内容

当日は、①介護予防講習会、②伊豆半島ジオスポット紹介、③お絵かき伝言ゲーム、④測定・マルシェというプログラムで行った。今回のイベントでは、集客活動に取り掛かるまでに時間がかかってしまった点や運営側への情報共有が不足してしまった点など反省点が多く見られた。イベントを開催する上で、様々なリスクマネジメントが必要になることを理解した。



伊豆半島ジオスポット紹介の様子



イベントのチラシ

※インクルーシブ自転車：株式会社オートクラフトIZUが制作する年齢・性別・経験・障がいの有無などに関わらず全ての人が楽しめる自転車のことである。

【スルガ銀行×伊豆市 e-bikeを活用したシティプロモーション（沼井）】

☆SNSで中伊豆のジオサイトの紹介×e-bikeのツアー動画を公開!!

活動内容

スルガ銀行さんの伊豆市のジオスポットのSNSシティプロモーションに取り組んだ。e-bikeで各ジオスポットを巡り、歴史や成り立ちなどのガイド解説を行った動画をスポットごとにSNS（X、Instagram、Facebook）で発信するといったものだ。動画内ではジオスポットの発信だけでなく、サイクリングと相性の良いジオ菓子をはじめとする伊豆半島のご当地グルメの紹介も取り入れた。

課題や反省点としては、今回のプロモーションによってその後、地域にどのような効果が生まれたのかが不明瞭な点である。今回のプロモーションは魅力に感じてもらい、足を運んでもらうことではじめて成功と言える。私自身、プロモーションを講じる上でその後のフィードバックの重要性を再確認した。

※e-bike：電動アシスト自転車



多世代の居場所づくり

多世代の居場所づくりと防災教育の実践

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2024年度のもの
(地域共生) 3年 川原綾花、菊地凜太郎
(地域環境・防災) 3年 占部暖花、沼崎沙耶

指導教員：○教授 山本崇記、教授 吉川真理、教授 須藤智、講師 立花由美子
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
龍津寺
静岡市立清水小島小学校
52ゆめひろば
静岡市役所文化財課

地域概要

多世代の居場所づくりフィールドは、静岡市清水区の小島地区を拠点として活動をしている。小島地区は、興津川沿いにある山に囲まれた自然豊かな地域である。「土曜子ども寺子屋」を開催するなど子どもたちの居場所づくりに取り組む龍津寺を拠点とし、その他にも小島で活動している様々な地域コミュニティに関わり、子どもから高齢者まで、多世代が交流を深めることができる「居場所づくり」を目指して活動をしている。

これまでの活動

- ・龍津寺土曜子ども寺子屋
- ・ほうもう舎
- ・SDGsイベント

小島地区の課題

- ・少子高齢化
- ・住民が集える居場所の不足
- ・小中学校の統合

子どもから高齢者まで
多様な人が集える
場づくりを目指す！

2024年度の活動について

①地域を知る・課題発見

・龍津寺勝野秀敏住職との懇談会 6月13日(木)

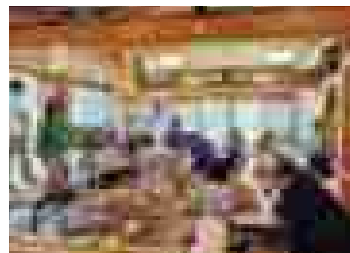
本フィールドの拠点である龍津寺の勝野秀敏住職と、小島地域の現況や社会資源の在り様、地域課題の現状などについて意見交換を行い、**学校の統廃合**や**人口減少**などの中山間地域における課題、**子ども達の遊びの場や交流の機会・場が少ない**といった地域課題があることが分かった。



↑ 懇談会の様子

・龍津寺土曜子ども寺子屋への参加&地域散策 5月18日(土)、7月6日(土)、11月16日(土)

寺子屋は、子ども達の伸び伸びと活動できる居場所であり、見守る大人にとっては子どもの元気なパワーをもらえる、場にいる全員にとっての居場所だと実感した。地域散策では、子どもたちに陣屋を案内してもらったり、小島生涯学習交流館への挨拶や、ゆめひろばの見学をした。**小島の交通や町の様子・雰囲気**など、**実際に歩き目で見ることにより地域を知れた。**



↑ 龍津寺土曜子ども寺子屋の様子

・清水小島小学校での奉仕活動参加 7月6日(土)

小島小学校PTAの清掃活動に参加した。清掃活動を行いながら保護者の方と交流を行い、「**今の小島には何が必要か**」や子どもたちの「**居場所**」について話すことができた。**子どもたちが自由に活動できる居場所**やイベントなどがあればよいという話になり、**学生が実現**できないか、具体的な検討を行う必要性を再認識した。

・小島小学校150周年記念式典展示見学 11月9日(土)

記念式典の展示で、在校生の取り組みの記録や作品を観覧した。50年前のタイムカプセルの中身や昔の雑誌などの展示もあり、**小島で生活してきた方々の歴史に触れた。**授業を通して**地域住民の方々**、そして**子どもたちの小島への愛着を育んでいる**ということが分かった。

②課題への取り組み ～居場所づくりを目指して～

・秋のゆめひろば祭り 10月20日(日)

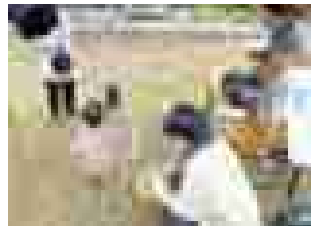
小島生涯学習交流館跡地にある芝生広場「ゆめひろば」で、管理を担っている52ゆめひろばさんの共催で開催した。輪投げや読み聞かせ、紙ひこうき大会などを行った。昨年度から**多世代交流の場としての活用を模索**してきた。あまり活用されていない現状と**子ども達の遊び場や交流の場が少ない**という**地域課題**から、皆が楽しめる秋祭りをコンセプトに、多世代が集う新たな居場所づくりを試みた。当日は地域の方々と交流をし、子どもたちの楽しむ姿を見れた。子どもたちが集える場の1つを**実現できた。**

・小島陣屋跡 御殿の書院完成記念イベント参加 12月15日(日)

静岡市役所文化財課の依頼で書院完成記念イベントの広報を行い、当日イベントに参加した。「小島の魅力」に関する動画を3つ作成し、文化財課Instagramにてイベント周知を図った。当日は小島陣屋にゆかりのあるちりめんかえでを模した模造紙に、陣屋や小島に対する「思い」を参加者を書いて頂き、また、「**思い**」を直接お聞きした。地域のシンボルの1つである小島陣屋で、小島や陣屋の未来について考える交流を行い、**地域の方々にも還元できる記録を残せた。**



→ イベントちらし



→ 輪投げの様子



→ 書院完成イベントでのアンケート

③取り組みから見えた課題と展望

課題

「住民が集える居場所の不足」を課題として活動してきたが、**持続の困難さ**が浮き彫りになった。授業内の取り組みだけでは、「居場所」を地域に定着させることが難しい。よって地域コミュニティと密に**連携**して、取り組みを**継続**する必要がある。

今後の展望

今年度からグローバル共創科学部の2年生と共に活動しており、これまで以上に広い視野と発想を活かす活動ができた。今後も**地域との関わりが継続し、私たちが行ってきた取り組みが探究されることを期待する。**

これまで取り組んできたフィールドワークを振り返って

小島で約2年間活動を行い、多くの方々と出会い、様々な経験をした。活動を通して生まれた繋がりをここで途切れさせることなく、自分も小島に関わる当事者としてこれからも繋がりをより一層広げていければと思う。



小島の方々と様々な場面で関わってきて、地域の方との交流や関係を構築していくことで見えてくる地域課題があることを学んだ。そして、様々な団体や個人の方々に声をかけていただき、幅広い活動を行うことができた。

小島での活動を通して、実際に地域に入ってお話を聞き、目で見ることで課題の発見につながり、座学だけでは分からない経験と学びを得られた。様々な主体にそれぞれの願いや課題があり、全てを叶えることの難しさを知った。



小島地区の方々と関わる中で、大学生が実際に地域の中に入ってどのような形で地域貢献ができるのか考えると共に、地域の方と深く関わることで見えてくる地域課題が見えてきた。勝野さんを中心とし、様々な方々にご協力をいただきながら小島について考えることができた。

地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさんの声をご紹介します！

地域創造学環のフィールドワークは、多くの地域の方々にご協力をいただいています。
最後にフィールド活動でお世話になっている方々から、これまでの活動についてお伺いしました。

※表記のご所属、お役職名等は2024年度のもの

清水港周辺地区フィールド

フィールドワークは「支援～伴走から自走へ」

まず、関係者皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

私は6年間フィールドワークに関わり、最初の3年間は学生の主体的活動の支援だったが提案止まりであった。

次の2年間は学生提案の実現に向けた伴走、過程を踏んだ「スマイル・ロゲイニング1と2」ができた。

最終年度は、学生の自走の取組を見守り、「清水おでかけマップ」として形になった。

地域との関係性ができつつある中で、惜しまれながらの終了でした。

有限会社都市環境デザイン研究所 代表取締役 木村 精治 様



庵原フィールド

さて、今年度で最後のフィールドワーク、そして報告書へのコメントとなります。

今でも私は卒業生と食事に行ったり連絡を取ったりと繋がりは続いています。

そして何年かを振り返ってみれば大きな成果がふたつあります。ひとつは学生さんが地域の方々と接し、歴史や文化、特産物、自然を感じたままで、素晴らしいロゴマークを作成し、それを残してくれました。今では地域シンボルとして旗や名刺に入っています。もうひとつは、学生さんの協力により「清水いはらフェス」を開催し、道の駅設置に向け大きく前進したことです。考えてみれば、フィールドワークは学生さんの成果として地域に残り、これからもずっと続くものだと思います。

公益財団法人静岡市まちづくり公社
健康スポーツ課 課長 酒井 政幸 様



おまちフィールド

学環のみなさんとは、2019年の秋からのお付き合いです。「春はイベント体験、その年の秋に、学生主体のバルイベントを開催してみる！」・・・が当初の活動計画です！コロナ禍により、「学生自主企画バル」は1回にとどまりましたが、店舗開拓、チラシ作成、学割企画のPRなどなど、静岡おまちバルでは初の「スイーツテーマのバルイベント」の実現は、大変意義深いです。その他、プロ指導のもとでの電子ブック原稿の執筆やSNS活用の体験は、必ず、今後に活かせることでしょ！みなさんのこれからのご活躍、大いに期待してます！！

静岡おまちバル実行委員会 実行委員長 松下 和弘 様



浅間通り商店街フィールド

大学生×商店街…学環生が残してくれたものは？

浅間通りには視察や研究対象としていろいろな学校の学生たちがやってきますが、継続してフィールドワークを行ってくれたのはみなさんだけでした。商店街の実情を調べ、浅間神社について学ぶところからはじまり、イベントでのお手伝いは自分たちで企画し運営する子ども広場に進化していきました。子供たちを楽しませる様々な企画は訪れた親子に浅間通りの思い出をつくってくれたことでしょう。

懐かしさを感じる門前商店街であり続けるには、ちいさなお客様を大切にすることですね。若い人たちの声も聞かなくては。フィールドワークに真摯に取り組んでくれたみなさんが、いつの日か浅間通りを懐かしいと思い出してくれたら幸いです。

静岡浅間通り商店街振興組合 理事 原木 公子 様



焼津市浜通りフィールド

太田先生並びに学生の皆さまには、「ハマノヒマルシェ」及び「浜通り夏のあかり展」の事前準備・当日運営を含め、焼津市浜通り地区の活性化に取り組んでいただき誠にありがとうございます。

浜通り地区のまちづくりを検討するなかで、「食文化」や「帆や」に加え、小泉八雲ゆかりのコンテンツの活用策をご提言いただいたことは、浜通り活性化フォーラムをはじめ地域の方々にとっても良い刺激となりました。

今後社会に出てからも皆さまの鋭い感性と力を存分に活かし、様々な形で地域づくりに関わっていただけると嬉しいです。

焼津市商工観光課 主査 望月 拓海 様



浜松文芸館フィールド

浜松文芸館が大切にしている合言葉は「AIが発達する今だからこそ、あらゆる世代の人に自ら書くことを大切にしてほしい！」です。

その文芸館の活動に、若い静岡大学の皆さんが参画し、多くの風を入れてくださり感謝しています。ポスターの作成や合作俳句をつくる「俳句ガチャ」の設置に始まり、子どもたちと共に活動したワークショップ、学生さんが造形した作品と俳句をコラボした展示会…など、まさに新風が吹き込まれました。企画し行動する挑戦・実践の場を提供できたことが文芸館として素直にうれしいです。

「挑戦しなければ明日は変わらない！」元館長下石精子さんの学生さんへのメッセージを、最後に改めて贈ります。皆さんの未来に幸多きことを願っています。

公益財団法人浜松文化振興財団 浜松文芸館長 伊熊 敬一 様



佐久間フィールド

わが故郷の「川合花の舞」に携わっていただきありがとうございました。2024年はコロナ禍を乗り越え5年ぶりのほぼ完全復活に花を添えていただき感謝します。

過疎化が進む地区で皆さんの若い力は地元活性化に大いに貢献され地元は大喜びでした。

短い期間での練習にも係わらず真摯な取組みで本番は大成功でした。本番当日の楽しそうな満面の笑顔が心に焼き付いています。

今後も地元活性化に繋がることを心より願っています。

川合花の舞保存会 水上 武彦 様



とうもんの里フィールド

ご縁をいただき、静大の学生さん40名をとうもんの里にお迎えしました。

フィールドワークのだいご味は、いかに自分を知ってもらうかに尽きます。私も学生さんたちに知ってもらうことで、卒業生の再訪に繋がっていると思います。どんな選択も、後悔のない選択はありません。決めたら、「石の上にも3年」進路先で泣いた経験も今は輝いている卒業生たちの話を聴くと、今も昔も変わらないと思います。

あなたたちの作る未来は私の未来。期待しています。

NPO法人とうもんの会 理事長 名倉 光子 様





御前崎市フィールド

御前崎市フィールドワークに携わっていただいた学生の皆さんに、改めて感謝申し上げます。今年度、当市は市制施行20周年と干し芋誕生200年を迎え、「干し芋プロジェクト」を立ち上げました。皆さんには歴史調査をはじめ、大産業まつりでのパネル展示・発表を行っていただき、地域の魅力を再発見する貴重な機会となりました。この経験を通じて培った探究心や行動力を活かし、今後も社会の変化に適応し、新しい価値を生み出す人材として活躍されることを願っています。地域と向き合い、学び続ける姿勢を大切に、多様な視点を持って社会に貢献していきましょう。

御前崎市 企画政策課 奥柿 敏之 様



松崎町フィールド

これまで静岡大学の学生たちが松崎町を訪れ、地域の方々と交流しながら、さまざまな課題に挑戦してくれました。特に、高校生にとっては、大学生と協働することが学びのロールモデルとなり、貴重な経験となりました。ともに活動する中で、高校生は地域への視点を広げ、主体的に考える力を養うことができたと思います。このような機会を提供してくれた皆さんに心から感謝します。松崎での経験が、皆さんのこれからの歩みに生かされることを期待しています。

静岡県立松崎高等学校 教頭 稲葉 渉 様



東伊豆町フィールド

2年半にわたるフィールドワーク活動お疲れ様でした。チームで地域活動に参画すること、地域の人たちの想いにふれる機会、自分たちで立てた計画を遂行する難しさなど、様々な学びが得られる活動だったのではないかなと思います。

東伊豆で得た学びを携えて、みなさんへの社会貢献に取り組んでいただけたら受け入れ団体としてこれ以上に喜ばしいことはありません。

ぜひ気が向いたら東伊豆にも遊びに来てください。いつでも歓迎しています。

合同会社so-an 代表社員 荒武 優希 様



伊豆半島全域（ジオパーク）フィールド

2年目となった伊豆半島ジオパークの情報発信活動。13名の学生さんのうち、1/3は2023年からの連続参加の方たち。みなさん「大人の顔」になっていて驚きました。お会いしなかった数か月の間、学内で濃密な学びの時間を過ごしたのだらうと想像できました。本取り組みに関しても、学生さんたちによるプロセスの改善が複数見受けられ、事前準備の段階から、チームがワークしていると感じましたし、アウトプットも前回より解像度が上がったものになりました。個々の学生さんのリーダーシップ、オーナーシップの賜物だと思います。

スルガ銀行 深田 聡朗 様



多世代の居場所づくりフィールド

これまで小島地区と龍津寺の寺子屋に関わってくださった静岡大学地域創造学環のみなさん、本当にありがとうございました。一期一会の短い時間でしたが、子どもたちや地域のみなさん、他大学の学生ともふれあい、一緒にいることを喜び合えてとても楽しいひとときでした。地域課題の解決という命題と同時に、心を開いて子どもたちと野球をしたり一緒にお絵描きをしたりできる「自由さとやわらかさ」が出発点かなと思います。一度でも知り合えたみなさんは、もう大切な友人です。またお会いしましょう。

龍津寺 住職 勝野 秀敏 様

静岡大学 地域創造学環 2024年度フィールドワーク報告書

2025年8月発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 地域創造学環係

【報告書表紙デザイン】

静岡大学 地域創造学環 アート&マネジメントコース 宮城 羽那
